
魔王代理人の日頃

霜月ゆのみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王代理人の日頃

【Nコード】

N7432Z

【作者名】

霜月ゆのみ

【あらすじ】

突如、謎の現象に巻き込まれた高校生兼根っからの主夫体質の回座宗谷は、いきなりの如く常識外れの異世界にたどり着いていた。そして急に課せられた正式な魔王が決まるまでの『魔王の代理人』としての役目。しかし、前魔王から受け継いだ魔核をもつ宗谷は、正式な魔王になる権利があるため、半ば無理やり『国立アーザック王族学院』に魔王候補生の一人として入学させられた。魔王級の魔力を持つが、魔力の扱いは子供以下……こうして彼の非日常の人生がスタートした。

1 壱 事實は小説よりもヤバい

『神隠し』

人間がある日突然、山や森などで行方不明になる現象。

誰もが一度は耳にしたことがあるがこの単語は、実は案外身近に存在しているのではないだろうか。

道端に落ちている石ころのように、隅に生えている雑草のように人はただ気に留めていないだけで、この謎の現象は、当たり前のように起こっているとすれば。

無力な人間は、一体どうすればいいのだろうか。

抗おうとするのだろうか？

打ち勝とうとするのだろうか？

考えるまでもない。

手の打ちようもなくその現象に巻き込まれるのが関の山だろう。

人が消えるのを。

人がいなくなるのを。

呆然と見るだけでお終いだ。

だが、ここで気づいてほしいポイントがある。

『神隠しに巻き込まれた人間は、どうなるか』である。

死ぬ？

消滅？

いやいや、なんでもそうネガティブ考えるものではない。

実際に、現在進行形で『神隠し』にあったと思われる俺が生きているのだから間違いない。

なんなら俺の考えを教えてやろう。

『パレルワールド 平行世界の出入り口』

人間には解明しきれないこの世界。

何があっても不思議ではない。

宇宙なんて難問の塊も存在する訳だし。

もしも平行世界が実在すれば、そのもう1つの世界は一体どんなものだろうか。

言語が違うかもしれない、独自の社会構成で成り立っているのかもしれない、文明が飛躍的に発達しているかもしれない、遣伝子そのものの仕組みが違うかもしれない、もしかすれば……なにもかもが……全てがまるで違うのかもしれない。

しかしこの考えは、あくまで俺の推測で、憶測だ。

そう考えないと今、俺がいるこのおかしな世界に納得がつかない。ある意味、この考えは俺を安心させるために俺が勝手に考えた絵空事なのかもしれない。

まあ、絵空事であろうが妄想だろうが、本当の【答え】というものは存外、簡単に知ってしまうのかもしれない。

いきなりですが、ただ今この俺こと回座宗谷かいざ そうごは危機に陥っています。

なんと、気付いたらちよと目の前で3人ほどの見ず知らずの方が長い刃物を俺の首元で止めて、動きを封じているのです。

……………えっ？

あれれ？

一体どういうことなんだ……！？

なんで俺こんなとこにいるんだ！？

……………落ち着け、落ち着くんだ。

こういう時こそ慌てず、冷静になってこの状況を把握するんだ……。

…。

慌ててる時こそ、冷戦沈着に状況分析だ……！

状況説明開始！

両腕と全身を縛られ、口は布で縛られ声が出ず、謎の薄暗いかなり広い部屋の真ん中でなんか変な服を身に纏った仮面の奴らが10

00〜2000人の大群が取り囲みつつ、なんか意味不明な呪文のようなものをかれこれ1時間ほど唱えている。

……………。

うん、理解不能。

えっ、何コレ、新手のいじめ？

「~~~~~！」

声を出そうとしても、やはり縛られている布のせいかまったく声が出ない。

布は俺の声を遮るようにし、俺はただ呻き声だけが周りに響いた。そして、現状を把握できない俺をひたすら無視するように周りの奴らは一心不乱に呪文らしきものを唱えあげている。

新手のいじめなら、俺は教育委員会に駆け込むところだが、雰囲気はどっちかというところちょっとヤバめの宗教団体だ。

何故このような状況にたどり着いたのか……正直自分でもよくわからなかった。

まあ、こんな状況を分かる奴なんて日本広しといえど、そう簡単には見つからないと思うが。

しかし、覚えている範囲でこの事態になるまでの経過を巡り返そうと思う。

もしかすれば、何かこの現状に至った原因が見つかるかもしれない。

原因とまでいかなかったも、何かヒントがあるかもしれないし。

探すだけ探してみよう。

どうせ今できる事なんて考える事くらいだし。

今日、俺は近くの高校に入学したばかりの世間一般でいう高校生1年生というものである。

つい先ほど入学式を済ませ、360°パノラマの田舎風景の舗装

されていない道を歩きながら帰宅していた。

俺の現在住んでいる日ひ瀬村は、いわゆるド田舎というワードがしっくりくる、辺り一帯のほとんどが田んぼと山。

交通の便は、1日数本しか通っていないバス。

電気製品などほとんど目にしない、かなりのザ・田舎である。

家……と、いうより小屋という表現の方がしっくりくる俺の家は、帰ると誰もいない。

小さな小屋で俺が一人。

世間一般的に思っている一人暮らしとはかけ離れた暮らしだ。

俺はいわゆる天涯孤独というものであり、血縁関係を持った知り合いなど、生まれてこの方会ったことがない。

冬。

路地裏のゴミ捨て場の中に、俺はへその緒がついたまま、ゴミ捨て場に捨てられていたところを、警察が発見したらしく、そのまま一時的に保護された。

だから俺は両親の顔も知らないし、正確な誕生日を知らない。

一応施設に引き取られ、推測で年齢を決定。

当時の俺の体重、出産推定時刻などを元に、年齢が決定した。

俺は16歳だが、15歳でも17歳でもありえるということだ。

そんな過去を持つ俺だから。

家族という家族が存在しない。

母もいなければ父もないし、祖母もいなければ祖父もない。

奨学金などで、俺はこうして高校生になるまで立派に成長できた。

だが、高校生になったからといって、まだ一人前になれた訳ではない。

しっかりと勉学に励み、しっかりとどこぞの企業に勤め、給料をもらって一人前だ。

もちろん、年齢が進むにつれ、金の入用は仕方のないこと。

今までは新聞配達などで生計を生きるか餓死するか瀬戸際で立ててきたが、さすがに高校にもなると無理がでてきた。

何が起こっているかが分からなかった、理解できなかった、把握できなかった。

状況を掴めないまま取り乱した。
現状を理解できないまま混乱した。

な、なにがどうなってる……！

俺は地面につひま跪くように倒れ込み、そのまま口から大量の嘔吐物を吐き出した。

口一杯に広がる胃酸の味。

気持ち悪さは増していき、意識も保てる自信が無くなってきた。

その瞬間。

目の前で亀裂が走った。

俺は思考が……停止した。

別に、たぶんあの時の状態なら、俺は大木に亀裂が走ろうが、大地に亀裂が走ろうが、たとえ海にさえ亀裂が入ろうが軽く驚く程度で済んだと思う。

だが、そんなレベルの話じゃない。

そんな低い次元の話じゃない。

亀裂が入ったのは……空間である。

いきなりの事である。

目の前で何も無い場所に亀裂が入ったのだ。

何もない場所に。

まるで刀で斬られたような。

亀裂。

？。

俺の頭はそれで埋まる。

疑問、疑問、疑問。

ハテナで埋まり、疑問で溢れる。

分からない。

何だコレ？

全人類の常識から外れているような事が目の前で起きている。

まったくもって、分からない。

この意味不明な現象はいつたいなんなんだ。

俺の興味に似た疑問は絶えず働く。

亀裂を、俺は時間が止まったかのように見続けた。

見続けて、眺めて、傍観した。

よく見ると亀裂の周りは、何故か景色が歪んで見えた。

まるで、空間がねじ曲がっているような、世界の仕組みにズレが

生じたように。

亀裂は少しずつ、少しずつと、ちょうど大人一人分入れそうな大きさの穴にまで広がった。

俺は6分の恐怖と4分の好奇心で、その穴に歩み寄った。

やや狭い俺の歩幅からは、やはり心の中で怖がっている俺が見えた。

心情を察しながら、俺はやや距離を取ってその穴を見る。

穴の中は暗い……いや、暗いでは御幣があるかもしれない。

『闇』

ここではそう解釈した方が正しいだろう。

まだ日が十分に昇っている時間帯に、その穴はまるで光が入るのを拒むように、その穴の中は『闇』で広がっていた。

恐らく、地獄というものはこんな場所なのだろう。

そう思わせるほどの……『闇』。

なんて悠長な事を考えていたら、吐き気がまた襲ってきた。

この現象が起きてから、やけに俺の体調は異変を起こす。

俺はその正体不明の『闇』から、逃げるように帰ることにした。

足を方向転換させ、自分の足で大地を踏み締めようとした……はずなのだ。

俺は足で地面を踏みつけられなかった。

穴が……引きずり込んでいるのだ。

吸引というのは少々違う、まるで俺だけを限定した引力のような、不思議な力で穴へと誘導されようとした。

逃げるといふ選択肢は、完全に無効かされた。

焦って全身に力を入れようとしたときにもう穴の淵。

俺の脳からの命令より、その穴の吸引速度が速かった。

そして 俺はその穴に引きずりこまれた。

急に、咄嗟に、体を動かす暇も、反応する隙も。

その穴は決して許さず、重力を無視するように、気付けば俺は引きずり込まれていた。

走馬灯が走る猶予さえ与えてくれないその穴は、俺を静かに、一瞬で引きずり込んだ。

意識はまるで眠る様に、抵抗すらできず失っていた。

まあ、そんな経緯があり、俺は意識が戻ると、このような状況にあるわけだが……。

ダメだ、まったく分からない。

というか現状に至るまでのヒントになりそうなものが無い。

役に立たない記憶だ。

そんな考え事をしてしていると、周りの奴らが唱えていた呪文と思われるものが一斉に止んだ。

すると、大群の中から1人が俺の目の前に歩み寄ってくる。

ちょうど俺と間が1mほどの地点に立つと、俺の首元に刃物を向けていた3人組が刃物を鞘に納め、引き下がった。

歩み寄った1人が片手に掴んでいた杖のようなものを上へ掲げ、大群の方へ向きなおした。

「準備は全て終了した。ではこれより、『魔王封印の儀』を執り行なう。各地から集まった名のある高僧達よ。己の全力を尽くし、封印術式を展開せよ！！」

いきなりだがここで、分かったことが4つある。

1つは、俺の目の前に歩み寄った奴は、声からして高齢の男性と

いうこと。

取りあえずここでの呼称は老人とでもしよう。

2つは少なくとも此処は日本語が通用するらしい。

最初にとある外国の彼方へ拉致されたと思い、低い英会話力でどう乗り越えるか真剣に少し考えていた自分が恥ずかしい。

3つは、ここにいる人間は聖職者のようだ。

見ず知らずの人間が言った言葉を信じるのもなんだが、冗談をいえる雰囲気ではない。

先ほど言い出した中二病的発言もおそらく冗談ではない。

4つは……ここでは常識が通用しないということだ。

何故そう思ったか。

そんなのは至極簡単だ。

周りにいた仮面の人間どもが一斉に人差し指で宙をなぞると、まるで空間に映像を投影しているように、六芒星や五芒星といった、漫画やアニメの魔法使いが使ってそうな魔方陣が、宙で組みあがっていくのだ。

トリック？

手品？

奇術？

そんなものではない、コレは俺が見る限り、正真正銘の『魔法』であった。

根拠などは存在しない、だが十分に分かる。

こんなものが、手品なんかじゃできないことくらい。

呆然としながらやや状況に戸惑っている時だった。

目の前に巨大な箱が数十人がかりで運ばれてきた。

んっ？　なんだコレ……？

箱は先ほど運んできた者達が、手際よく次々と解体していった。

フタを外し、側面を壊し、箱は本来の姿を失っていった。

少しずつ、少しずつ中身が見えてきた。

そしてその中身は　人間の死体であった。

「！！」

箱の中に入ってあったのは、大柄な男であった。

戸惑いが倍増してしまったが、どうやら虫の息ながらも生きていた。

いや、この状態を生きていると言っているのだろうか。

身長は3m以上はある大男が、全身を隠すほどの大量の4mもの巨大な釘で固定され、四肢は削ぎ落とされ、両目は潰され、耳は落とされ、さらには体中に火傷、凍傷、切傷、刺傷……一体どうすればこうなるのだろうかと思ってしまうほどの、怪我を負っていた。

だが生きている。

この男は一体何者なのだろう。

しかし、そんな考えをめぐらす時間もなく突如、周りにいた奴等が詠唱を始めた。

大男と俺は、先ほどの大群が創り上げた眩しい光を放つ魔方陣に、まるで虫を閉じ込めるように魔方陣で四方を取り囲まれ、大男は詠唱と同時に禍々しい光に包まれ、肉体は溶けるようになっていき、小さく紫色の弱弱い光を放つ人魂のようになった。

と、いかにも常識外の事が起こりすぎて驚くことさえ馬鹿馬鹿しくなってきた。

その人魂のような紫の光はこちらに向かい、なんと俺の心臓部分へ溶け込むようになっていった。

「~~~~！！？」

激痛、いや激痛なんかで表せるものじゃない。

俺の体に、異物が入ってくるのがしつかりと、気持ち悪いほど鮮明に認識できる。

ジグソーパズルのピースを、まったく違う箇所になじ込んでいるような。

違和感で体が埋め尽くされるような。

死痛。

痛みが広がる。

水面に小石を投げ込み、全体に波紋が広がる様に。否が応でも痛みが全身へと伝わる。

「~~~~~!!!~~~~~!!!」

苦しみで悶え叫ぼうが、涙を流そうが。

声は出ず、涙にはなんの意味さえも無かった。

一体なんなんだ!?

ここは何処で、お前らは誰で、何が目的で、俺の体で何をしたんだ!!

「……すまないな少年。だが許せ。我らの正義のため、安らかに逝ってくれ。恨むのなら『迷界』^{アナザー}からここへ来てしまった自分を恨んでくれ」

迷界!? 自分を恨め!?

一体何を言っているんだこの野郎っ!!

しかし、どんなに思考を行おうが、痛みは全身を蝕むように進んでいく。

……死ぬのだろうか?

まあ……別にどうでもよくなってきた。

人間、諦め肝心だ。

16年という短い人生だったが、特に思い返すような走馬灯は存在しない。

このかた俺の人生に幸せというものはあっただろうか。

家族はなく、周りからは哀れみの視線を受け、思い出の欠片もな

く。誰にも見向きされず、関わりを拒まれ、気持ち悪がられ、捨てられた。

頑張っても頑張っても。

誰も俺に関心を寄せてはくれない。

向けられるのは、カスみたいな偽善と、しょうもない同情だけ。

そんな。

ただひたすら、生きることのみに執着した人生に。

意味は……あつたのだろうか。

……。

……。

……幸せになりたかった……な。

「生きたいのか？」

！？

突然、誰かに声をかけられた。

周りにいる奴等ではない。

それだけは言える。

断言できるのだ。

その声は、まるで直接脳に伝えているような、不思議な感覚であった。

「生きたいのか？ と、聞いてるんだよ。 さつさと答える糞子^{ガキ}供がっ」

口は悪かった。

しかし低く、重圧感のあるその声は、ひたすら俺の脳へと伝えられていく。

どこか恐怖を…… 畏怖さえも感じさせられるその声は、鮮明に俺の元へと届いてくる。

生きたい…… いや、死にたくはないけど、生きる意味も特にな……な。

正直、ここまで来たら自分の事が他人だ。

地獄に行こうが天国に行こうが。

生憎、信仰心を持たない俺には関係ない。

「そうか、なら遠慮なくその体を使役させてもらっわ」

刹那、俺の体から痛みが消え、逆に力が湧き出てきた。

いや、力という簡単な言葉でかたつけていいのだろうか。

全身から今にでも放ちたい、この膨大の力を。

俺は…… なんといいばいいのだろうか。

何処からやってきたかも分からず、泉が湧き出すように、急に内

部から放たれたこの力を。

縛っていた縄を強引に引きちぎり、布を取り、豪快に立ち上がった。

……えっ？ 体が勝手に……動いてる？

それと同時に、今まで俺を囲んでいた魔方陣が、光の砂のように綺麗に散っていく。

「……ど、どうということなのだ！？ 術式が……崩れていく！？」
俺の目の前にいた先ほどの老人が、宙に描かれていた光の魔方陣が消えていくのを、焦りながら見ていた。

「なあと、焦んなよ糞野郎共。単に『生体を別生体を生贄にして双方を完全消滅させる』という高位禁魔法も、その生体が先に死んでしめえば、そりゃあ誤作動も起こすわな」

「口が、勝手に！？」

「ど、どうということだ！ お前……一体その人間に何をしたっ！？」
先ほどの老人は、顔にはもう恐怖と混乱しかない……追い詰められた果ての表情を残しつつ疑問を投げつけ始めた。

「ああ、どうせ後先短いことは分かってたしな。どんな強大な魔力を持っていようが、さすがに350年は生きすぎた。肉体も精神もへとへとだ。だから決めた。この子供に吾輩の魔核^{ガキ}を全て移してやるんだ。我ながら面白いことを考えたと思ってるよ」

「なんだと……！ ま、待て！」

「いや、もうお前うぜえから黙れ」

俺の手（いや、勝手に操られているのだが）が老人に軽く触れると、老人はありえないほど遠くまで吹っ飛び、壁に衝突した。

「少々、眠っといってくれや。さてさて、おい子供^{ガキ}、聞こえてるか？」
聞きたくねえけど聞こえてるよ……。

「そうかいそうかい、まあ良い。取りあえず、今さっきお前に吾輩の全魔核^{スキル}をくれてやった、感謝して受け取れ」

はっ！？ 魔核^{スキル}！？ 一体なんなんだよっ！ 何の話なんだよっ

！！

「まあ落ち着け。まだ『迷界』^{アナザー}から来たばかりで混乱してるとは思うが……。取りあえず、手筈なら吾輩の部下がもうすぐ来る。説明は全部そいつに聞け、魔王の代理人」

おっ、オイ！ まだ聞きたいことが山ほど……！

「ふむ、さすがにそろそろ限界だわっ。……じゃあな、子供」^{ガキ}！！

体が急に軽くなった。

と、というか元の状態に戻ったとさえいいのだろうか。

体中を縛っていた鎖が、切れたような感覚だ。

おお、やつと自由に……！！

そんな感傷に浸っている時だった。

頭上から爆音が轟いた。

上から美少女が降ってきた。

……
いや、違うよ？

別にアニメであるような、『お空からかわいい女の子が落ちてきた』みたいな可愛いものではなかった。

片手には俺の身長ほどあるう大剣、首から上以外は鋼色に輝く鎧に包まれた身なり、異常なまでに整った顔立ちと、腰まではあろう絹のような黒髪をなびかせ、悠然と俺の前に立ちばかった。

クールな無表情と、どこことなく侍のような秀囲気を感じさせる彼女は、美しく、凜としていた。

……あれ？ 確かここ室内……。

上を見ると、やや予想通り、天井が見事に大剣で破壊されたような巨大な穴があり、そこからは満点の星空が綺麗に広がって見えた。わー星がきれい。

そんな軽い現実逃避を、現実には許さないように、俺を引きずり戻した。

いきなり侵入した女は俺を見つけると、いきなり胸ぐらをつかんできた。

「……貴様が『代理人』か……。魔王様も運が無いな、このような貧弱でいかにも間抜け面をした男を引き当ててしまうとは……」
口の悪い女は、そう言い残すと体が紅蓮の炎によって消し炭となった。

おそらくは少年に吐いた暴言に、神は激怒したのだろう。

「語り部を捏造するな」

ぐはっ！　なんて美しい関節技……！

「時間が無い、さすがに私でもこの人数は骨が折れる」

「奇遇だな、俺もこのままだと右腕が折れる」

いつまで関節技を決めているつもりだっ……骨がミシミシと悲鳴を上げてやがる……。

「では逃げるぞ」

そう言い残すと、謎の女は俺をひょいと軽々と片手で持ち上げ、なんと5m以上あつた天井の穴まで飛び上がったのか。

人間じゃねえなこいつ。

絶対何処かの戦闘民族だよ、尻尾はないけど。

「に、逃がすと思うか！　全員、術式展開準備っ！」

中にいる奴らが一斉に構えだし、またもや魔方阵が次々と現れているが、おそらく無駄だろう。

理由？

俺の目の前には巨竜ドラゴンがいるからだ。

某有名ゲーム風風に言うならば、『ドラゴンが現れた！』みたいな頭には3本の角が生え、巨大な2枚の羽根を揃え、一体全体何mあるんだよと突っ込みたくなるほどの巨体で待機していた。

「きよ、巨竜ドラゴン！？　何故そのような生き物がここに……！？」

「答える義理はない」

そう女は言い残すと、俺も（無理やり）乗っている巨竜ドラゴンが勢いよく、その巨大な2枚の羽根を羽ばたかせ、夜の夜空へと舞い上がった。

舞い上がったと思えば、一瞬景色が消えて見えるほどのスタート

ダッシュで移動し始めた。

「安心しろ、にゃん太郎は他の巨竜トラゴンとは桁違いの速度スピードを誇っている。まず追いつかれることはない」

「にゃん太郎？」

「この巨竜トラゴンの名前だ、私がつけた」

ネーミングセンスは0だった。

気付くと、先ほど俺がいたと思われる建物はすでに小さく遠のいていた。

建物は小さくなったとはいえ、この距離でも分かるほど巨大で立派な造りの赤褐色の建物だった。

一体、俺はあそこで何をされ、何がおきたのだろうか……。

それはそうとも、巨竜ドラゴンの物凄い速度のせいかな普通に息苦しいし喋りづらい。

それに、この常人なら気絶しそうな高さであまり驚かないのも、今日だけでも驚きの連続で、驚き疲れた……みたいな感じた。

風がなびき、ただひたすらに巨竜トラゴンに乗りながら、前へ前へと進んでいる時だった。

いきなり俺の目の前に現れて、俺をさらっていった彼女が俺に視線を向け、至極真面目な表情で口を開いた。

「さて、そろそろ話そうか。何故お前がここにいて、ここがどういう世界か。そして、これから何が始まるか……聞く準備は良いか？」

『魔王の代理人』」

1 忒 住めば都か魔王城？

『常識』

一般の社会人が共通に持つ、知識・意見や判断力を指す言葉。

意味の通りに見ていくと、常識とは人間の当たり前だと思っ
てい
ることを言っている。

だが、常識とは人によって変わるものだ。

変化し、移り変わり、変わりゆく。

必ず、人個人の常識をみんな持っている。

簡単な例をあげると、『卵焼きにはケチャップ』という人もい
れば『卵焼きには塩コショウ』という人もいるだろう。

まさしく十人十色、千差万別、多種多様。

だがしかし、個人の常識というのは、個人の価値観にも繋がっ
て
しまうのではないだろうか。

『こういうのが良いらしいから、こういうのが良いんだ。』

そんな子供みたいな戯言を吐いてしまう原因は、常識が価値観を
創り上げているかもしれない。

だから語り部の俺から読み手に伝えよう。

これから語るこの『常識』を。

既存の『常識』を全て捨てて。

受け止めてほしい。

この世界では『常識』なんて、何の意味も果たさないし、この世
界の常識は、既存の知識を驚かせる。

それだけのものなのだから。

冷たい風が吹く抜く中、俺の前に突如現れ、そして連れ去った謎
の女が、長い黒髪を靡かせながらもそのポーカークフェイスを保ちつ

つ、ゆっくりと口を開いた。

「先に自己紹介だ。私は十乃字小夜。歳は16、特技は剣術。好きなものは甘いもの。嫌いなものは下衆な人間だ」

最初に彼女の口から出た言葉は、普通の女の子(？)らしい自己紹介だった。

案外、話の通じるやつなのかも知れない。

「俺は回座宗谷。同じく16歳で趣味は料理。好きなものはこれと
いってなし。嫌いなのは汚い場所」

「男のくせに料理とは女々しい趣味だな。好きなものがないとは個性がないのかお前には。汚い場所が好きな人間はいないし、後、私を呼ぶときは十乃字と呼ぶように」

約7秒弱で俺の自己紹介は貶された。

汚い場所が嫌いというのは潔癖症という意味合いでいったつもりだったんだが……。

まあ、後は否定できないな。

「それは置いといてだ。で、本題に入ろう。まずここは何処なんだ？」

「日本だ」

簡単な返事が返ってきた。

……はっ？

「ジャパンだ」

「いや、言い換えなくていいよ」

「より詳しく言うのなら、ここは日本の三河辺りだな」

「み、三河？」

三河って確か今の愛知県の旧名……だったけな。

中学生の頃にならった記憶がある。

どういうことだ？

俺はあの『闇』に引きずりこまれた後、タイムスリップしたという
ことか？

魔法みたいなのを普通に使っている世界だ。タイムスリップがあ

つたて不思議じゃない。

よし、すこし質問をしてみるか。

「なあ十乃字、パソコンって知ってるか？」

「ばそこん？ なんだ？ 刀の名前か？」

よし、タイムスリップかこの女が物凄い馬鹿なのかの2択になった。

そう考えると思い当たる節もある。

先ほどから巨竜ドラゴンの上で景色を見るにしても、森林が多く、ビルなどの高僧物などは見当たる気配もない。

夜なのに街明かりなどは全く見られない。

十乃字が言ってる通り、ここが三河……愛知県だとしても、こんなに田舎ではないと俺でも分かる。

しかし、過去に来たということ肯定すると、昔、魔法のような不思議な力が実在していたという話になる。

実在していたならば、何故現在にはないのか。

教科書にすらそのような事実が載っていないのか。

様々な疑問点が浮かんでくる。

「『パラレルワールド平行世界』」

「はっ？」

いきなり十乃字の口から飛び出てきた言葉は、俺の思考していた考えとはまったく違う単語であった。

「この世界は、実は1つではなく、もう1つ平行している世界がある。その2つはまったく同じ様に、文化も、科学力も、人の数も顔も性格も。まったく同じ世界がある」

十乃字はおもむろに、訳のわからないことを語りだした。

一体その話が何の関係があるんだ……。

「だが、ある時。片方の世界で誤差が発生した」

「誤差？」

「隕石……か知らないが、地球外の宇宙からあるものが飛来したのだ」

隕石？ あの宇宙の？

「その飛来物はかなり巨大なものだったらしい。数々の国がまるまる消えるほどにな。だが、恐怖する点はそこではない、それといっしょに飛来してきた『何か』だった」

「『何か』？」

「そう、『何か』だ。全てが不明。全てが未知。ただあつたという存在しか分かっていない『何か』。その『何か』は片方の全ての有機物、無機物に激しい影響を与えたそうだ。生命体の突然変異、無機物の効果の変化。誤差は誤差を生み、その誤差は更なる誤差を生みだした。新エネルギー、新生物、新人類。その結果、2つの世界はまったく違う世界と変貌してしまったのだ」

……だんだんと、自分が何処にいるのかが分かってきた。

分かりたくもないが、現実を受け止めるのが大人というものだろう。

「つまり、俺は片方の世界から、このもう1つの世界へ来てしまった……」

「ご名答。私たちはそっちの世界を『迷界』^{アナザー}って呼んでるがな」

『迷界』。

確か俺が捕まっていた場所にいた老人が言っていた単語だった。

「基本的に、2つの世界は干渉し合わずに時間を経ているのだが、たまにあるのだ。2つの世界を？ぐ出入り口が出来上がることが」

出入り口、つまりあの時俺が見た『闇』だろうか。

「こっちの世界で高エネルギーを発生させると、2つの世界を隔てる境界線を歪ませてしまう。そして、その歪みから出来た出入り口を通過するともう1つの世界に行けるわけだ。まあ、稀な現象だから、こっちの住人がそっちに行くとはほぼ確実にこっちには戻ってこれないのだ。もう1つの世界を、まるで迷路に迷う様に。だから『迷界』^{アナザー}。そして、その世界から出入り口を通り、やってきたのがお前ということだ」

「……マジかよ」

「アジだ」

「いや、字面は似てるけど勝手に魚類にするな」

「ちなみに、こちらの世界から迷界^{アナザー}へ行った奴らは、超能力者^{エスパー}、化物^{モンスター}とか呼ばれているそうだがな」

なるほど、そう考えると、神話や日本の文献にもあるような、人外のものは、こっちの世界から来たということなのかもしれない。

おとぎ話みたいな話だったが……いや、まだおとぎ話の方が夢がある。

正直、まるで道化師に騙され続けているように、詐欺師に欺かれ続けるように。

俺はその話を聞いても、納得したようで信じられない。

まあ筋は通るだろう。

どんなことだろうが、過程が変われば結果が変わる。

この世界はどうかやら、地形なんかは基本的には同じみみたいだが、土地の名前、文化の進み具合、生物の種など、様々なものが違うみたいだ。

「丁度お前も見ただろう。お前が捕まっていた所は何千人もの高僧たちが、1人だけでもかなりのエネルギーが必要になる禁魔法……その高位クラスのをあれだけの人数で行ったら、出入り口ができるほどのエネルギーにギリギリとどく可能性がある」

それでもギリギリとは、本当に稀な現象みたいだ。

そして、その稀な現象に俺は巻き込まれてしまった……っと、いう訳か。

「……俺もついてないな……そんな出入り口に出くわすとは」

「まあ、あの現象を起こしたのは魔王様のせいみたいなものだからな」

「起こしたのは？　つまりその魔王様のせいで俺はここにきたと？」

「ああ、そうだ」

「で、お前のいう魔王様っていうのはもしかして俺がいた場所にいた大男？」

「恐らくその方だ。日本国王第76代目魔王、無間蛻様むげんぬけがら。先程、お前に魔核マキルを授けて逝かれたがな。で、私はその無間様の直属の部下で、色々と良くして貰った」

「なるほど、部下……。だけど簡単に逝かれたって言うてるけど……その、なんだ……。悲しくないのか？」

「ないな」

断言しやがった。

もうキツパリ言い過ぎて、逆に清々しいというか男らしい。

「と、いつて実は影で泣いてたんじゃ」

「この足は折れたいらしいな」

「すみません、全力ですみません」

この女、俺を反応する隙さえも与えず四の地固めに持ち込みやがった。

今日2回目の骨からのS Sが全身を伝っていく。

というか、今乗っている巨竜ゴドラゴンがいくら巨大でも、こんな足場が悪い所でよくこんなスピーディーに動けるな……。

四の地固めは、俺の必死な謝罪によって解放された。

「まあ、元々ご自身でも『吾輩もそろそろ限界だしな』。仕方ない、何か面白いことでも探しに行くか』と前々から呟いておられたしな」

軽いな魔王……。

というか、何が仕方ないんだよ。

「そこで、魔王様が思いついたのが『魔王の代理人』探した」

「『魔王の代理人』……。確か俺も魔王にそんな事いわれたな……あつ、もしかしてさっきの『魔王様のせいみたいなもの』ってのは、魔王は2つの世界を？げるのに一役かっていたってことか？」

「そうだ。ご自身の死期を悟っておられた魔王様は、予め『魔王の代理人』となる人間……。つまり迷界アナザーの人間を呼ぶために、わざと敵国の人間に捕まり、高僧達を呼ばせ、そして大量のエネルギーをこ自身の力を加えて出入り口を作ったのだ」

「敵国？」

「この国では、『魔王』というのは役職の様なものだ。国の政治を担い、常に国のために行動し、全ての決定権を持つ絶対の王。それが『魔王』だ」

「いや、別に普通に王で良いんじゃない……」

「仕事がそれだけならな。魔王の仕事は他にもある。例えば……戦争とかな」

「せ、戦争？」

「国の領土争いは深刻な問題だ。この世界はおおまかに2種類に分類できる。『侵略者』^{プレデター}という戦闘型の国と『平穩者』^{ピースペース}という非戦闘型の2種類の国。この2つはその国の魔王によって変わるが、侵略者主義国はとにかく好戦的だ。他者の国の領土を侵略し、自身の国を栄えさせ、大きくする。平穩者主義の魔王は基本的に内政を重視する。非戦闘的で、自衛に目を置いている」

その口から出るこの世界の現実。
今の俺には、イメージとしては『戦国時代』的なものを想像しているが、おおまか間違っではないだろう。

「しかし、兵器や武器といっても、弓や刀、最近広がってきた火縄銃はあまり使われない。理由は簡単。争いで勝利の鍵となる、兵器をも凌ぐものが存在する。強力で圧倒的な戦闘法。それが『魔法』だ。お前の世界には無いらしいが、この世界は在りとあらゆるものには『マナ』、別名『魔力』と呼ばれるものが含まれている。人間にも、虫にも動物にも。エネルギー体なのか、未知の物質なのか。まだ完全に解明しきれていない『マナ』だが、人間はその『マナ』を操作する『魔核』^{スキル}を携えている。魔核は優れば優れているほど、その外部の『マナ』を操作できる量が決定される。そして、『マナ』は人間によって変換・操作され、魔法となるわけだ」

「先生、頭が痛くなってきました」

「お前、折られるなら何処がいい？」

「と、思いましたけど頑張ります」

この女、本気で折るつもりだったぞ……。
目が本気だ。

「よし。では続けよう。で、その『マナ』と呼ばれる魔力を大量に操れるほどの魔核スキルを持つ、魔王。つまり巨大な力を持つものこそが、魔王になれるわけだ。そして、前魔王、無間様は過去に例をみない、強力な魔核スキルを持っていた。全力をだせば1人で1つの国をも滅ぼせるほどにな」

おお、あの人そんなに凄い人だったのか……。

ん？ そういえばその人の魔核スキルって……。

「もしかして、今その魔核スキルってのは……」

「もちろん、お前が受け継いでいる」

……予想通りだった。

「なんで俺が持つてるんだよ！！ というか受け継げるものなら他のやつらに継がせるよ！！」

「それが出来れば苦労はしないし、だからお前が呼ばれたんだ。魔核スキルはこの世界の人間なら誰でも持っているもの。魔核スキルは本来、受け継げるものじゃない。誰かに授けようとしても、どうしてもその人が持つている魔核スキルが邪魔になる。だが、魔王様は考えた。『そうだ、もう迷界アナザーの人間を適当につれてきて継がせちゃえばこの国安泰だな』と。確かに、もう1つの世界の人間は、魔核スキルを生まれつき持っていない。ならば拒絶反応も起こさず、すんなりと継げるわけだ」

「な、なるほど……」

分かった様で分からない。

と、いつか話が難しくてややついていけない。

「あくまで魔王というのは、他国に自分たちの領土を攻めさせないようにするための脅しの象徴みたいなものだ。基本的には争い事のような役割は無い」

「よかった……」

「まあ、暗殺はされるかもな」

「ダメじゃん！」

なんで暗殺されなきゃいけないんだよ!?

「そして、その魔王にお前が代理を勤める訳だ」

「いやだぁー……あれ? ちょっと待てよ……。何故『代理』なんだ? 流れたと就任くらいいくかと……」

ある意味、俺は魔王の後継者みたいなものだ。

おいおい、タイトル題名を変更しなければならぬじゃないか。

これからは『魔王の後継者』で再スタートしないと……。

「愚か者」

一喝された。

「魔王はスキル魔核、知識力、精神力などなど、総合的な力を見て決定するものだ。お前以外にも候補生はいる。本来、候補生から次期魔王を決定し、正式な手続きが終わり次第、現時点の魔王が引退し、次期魔王が正式な魔王となるのが、正しい順序なのだ……。今回は現時点の魔王が死んでしまうという事態にいたったため、次期魔王が決まるまで、代理が必要な訳だ。つまり、その間は」

「俺が代理……っと」

「そう。まあ妥当な判断だろう。無間様ほどのスキル魔核を受け継いでいる者だ。政治はともかく、他国を恐ろしめるくらいはできるだろう。一応、代理でもあるが、無間様のスキル魔核を継ぐ者として候補生にもなるだろう。候補生等が通う学校にも通ってもらう」

この世界に来てやはり学校は行く運命だったか……。

「……と、いうことは正式な魔王が決まったら俺は代理人から解放され自由?」

「まあそうなるだろうが……。いいのか?」

「なにが?」

「候補生である間は費用は国から出るため、衣食住には困らず、更に魔王になれば元の世界に戻る機会があるかもしれない。しかし、候補生を終わり、正式な魔王になれば、一生この世界で身分不明の人間で、職にもつけず、餓死するしかないぞ?」

「ぬっ……」

この女、俺を脅しているのか……。

確かに今の俺の所有物は、現時点で来ている衣服と、ポケットに入っていた、高校でPTAがお祝いに配布していたプチホットケーキというお菓子オンリーだ。

これだけでこの世界を生きることなんて到底不可能だし、まして魔王になれば元の世界に戻るチャンスも巡ってくる可能性が0でもない……。

「そういうことだ。まだ分からないことがあれば自分で調べればいいし、これからはしっかりこつちの学園にも通ってもらおうしな」

現時点でおかれている状況は、大まかだが理解できた。

疑問点もいくつかあるが、それはまた別の機会にでも調べよう。

まあ、嫌でも分かるかもしれないが。

「そろそろ着くぞ、振り落とされるなよ」

「はっ？」

考え老けていた俺を構わず、十乃字はそう言い出すと、巨竜ドラゴンがフリーフォール真つ青の速度で急降下していった。

「ぎゃあああああああああつあつあああ！？」

物凄い速度スピードで急降下。

取りあえず巨竜ドラゴンにしがみつき、振り落とされないようにしていたが、あつという間に地上に降り着いた。

巨竜ドラゴンが着地した辺りには、砂埃すなほこりが舞い、しばらく周りが見えなかった。

しだいに視界が良くなり前を見ると、そこにはいかにも魔王が住みそうな禍々しい城があった……訳ではない。

むしろ普通の城……というのも何か変だが、そこには俺の知っているような、和風の城があった。

俺の知識から例を挙げるとなると……外見や造りは姫路城にちかい。

空に向かって建ち並ぶ天守群と白く美しい白壁が広がり、天を舞う白鷺のように見える、別名『白鷺城』と呼ばれる、あの姫路城に。

巨竜を降りれば、十乃字は普通に言った。

真顔で、変化の無い声で。

「ここが今日からお前の城だ^{いえ}」

俺の嫌な予感レーダーはびんびんであった。

1 - 参 魔術は長く人生は短し

『平行世界』

というが、途中で片方の世界の『平行』^{バランス}が崩れてしまい、まったく違う世界になってしまえば。

その世界は別世界と呼んでもいいのだろうか？

今現在、俺がたどり着いてしまったこの世界はまだまだ俺の常識を覆していく。

もう、これは別世界と認識しようと思う。

トドラゴン
巨竜が存在し、魔法が使用され、文明に至っては滅茶苦茶だ。

土地の名前はまだ旧名、移動は基本的には馬、電気製品などは存在しない、武器といえば弓や剣（十乃字曰く火縄銃も最近広まってきただとか）などの野蛮なもの。

魚は地上では生きられない。

同様に、人間だって環境が変われば誰だって変化をおこす。変わって変わって変わっていく。

その変化に、体は、心はついていくのだろうか。混乱もするだろうし、挫折もするかもしれない。

そんな俺の変化を笑って見てくれれば。

まだこの笑い話は御の字だ。

笑い話がどう変化するのも。

語り部の俺の知ったことではないのだけれども。

「言語や地形は基本的には同じ……文明はこっちの方が数段落ちて
るみたいだな……魔法の研究の歴史はかなり深いな……。魔法を重
視した研究ばかりで科学の方が疎かになったのか……？」

薄暗い部屋の真ん中。

椅子に腰を掛けながら難しい表情を浮かべ、顎に手を置いているのが、こんにちは。

回座宗谷です。

俺はいきなりの新たな新居こと、この魔王城に住むことになったのが…。

この城は代々、魔王となったものが職場兼住居として受け継がれている、名誉と伝統ある城らしい。

城内はかなり広く、内心、案内板でも立てるや！　っと、突っ込むほどの広さだ。

そして、俺は城内の一角に存在する『ブックルーム書物室』でこの世界についての情報を、とにかく何でもいいから調べつくした。

一般常識、文化、食糧、生物、歴史、科学、金銭、哲学、思想、そして『魔王』についても。

一冊読んでは二冊目、三冊目と次々と読み荒らしていった。何でも良い。

とにかく情報が欲しかった。この世界の知識が欲しかった。

人間は、『分からないもの』が一番恐ろしいのだ。昔の人々は、雷や大雨、災害や疫病など、分からないものにとにかく正体を勝手に創り上げた。

雷は雷神、疫病は疫病神ってな感じに。

鬼や幽霊もそうだが、実際問題、これ等は怖いものではなく、怖さを和らげるものなのだ。

今の俺も昔の人々と同じだ。この世界が分からない。

まったく理解できない。だから理解しようとする。

俺は昔の方達のように、仮定の存在などは創り上げない。ただただ、情報を吸収していくまでだった。

「ほお、随分読んだのだな」

ふと、そんな声が後ろから聞こえ、振り向くとそこには俺をここに連れてきた張本人、十乃字小夜がすまし顔で佇んでいた。

「そりゃ、この世界で生きていくんだ。それなりの知識が必要だろ」

別段、俺は本を読むのが嫌いというわけではない。

むしろ好きな方だ。

暇な時があれば、よく本を片手に教室に残ったものだ。

もちろん、お金は使わず廃棄されている本を拾ったのだが。

「確かに、『魔王の代理人』になるんだ。それなりの教養は必要だし、しかし、外を見てみる」

「外？」

俺は椅子から立ち上がり、書物室の壁側にある出窓のカーテンを勢いよく開いた。

日の光が部屋を満たさんばかりに差し込んできた。

「……………oh、morning……………」

もう朝だったのか……………。

十乃字にこの城に連れてこられてから、俺はほぼずっとこの書物室で本を読みあさっていた。

連れてこられた時、時計を見たときはまだ10時だったため、俺は12時には寝るつもりで読んでいたのだが……………。

「その様子だと寝ていないようだな。まあ、良い。どんなコンディションだろうと、死ななければ問題ない」

「俺には問題大アリだがな」

こいつ、俺をなんだと思ってるんだ。

「兎にも角にも、今日からお前にも学校に行つて貰うからな」

「はっ？ 確かに学校には行くと聞いていたが、もう行けるのか？」

「昨晩の内に手続きは済ましておいた。教科書一式は、担任となる教師から受け取れ。制服は貰っておいたから、後で着る。サイズはこっちの目測だが問題は無いと思う。」

何気に敏腕なやつだった。

「では、早く食堂に來い。朝食なら用意しているからな」
そういうと、十乃字は規則正しい足音を響かせて、書物室から出て行った。

おお、朝食を作ってくれたのか。
何気に嬉しい自分がここにいた。

ここで、この城の説明をしようと思う。

この城にある部屋は、寝室が客用合わせて10室以上。
どこぞのホテルかと突っ込みたくなる厨房。

パーティー会場並みの食堂。

様々な書物を保管している、俺が現在いる書物室。

あとは巨大な庭園などなど。

俺が現時点で把握しているのはこんなところだ。

まだまだあると思うのだが、何分、この城は巨大すぎて分からない箇所が多すぎる。

まあ、その内分かるだろう。

「さて、一徹くらいなら大丈夫だろうし、食堂にいつて朝食を済ますか」

書物室から出、長い廊下を渡っていき、数回階段を下り、巨大なドアを開け。

階段を下り、塔から塔へ繋がる橋を渡り、巨大なドアを開け。

右へ曲がって、今度は階段を上がって、直進して。

……………遠いよ！

なんでこんなに広いんだよ！

そんなこんなで、やや走り、少々息を乱しながら食堂に到着した。

「おお、来たか。時間はまだあるが、さっさと食ってしまえ」

十乃字は先に食事をしている最中であった。

大きなテーブルに、俺の分と思われる朝食の皿が置いてあった。

メニュー、パンが1つ。

……………。

十乃字に視線をやると、気にしないようにパンを頬張りながら新

聞を読んでいた。

「……………あつゝ……………これしか無いのか？」

「材料はある。しかし、随分前に召使いやコック達が辞めてしまつてな。」

そういえば、この城は一応魔王が住む所。

実際はコックやら召使いなどが大量にいてもおかしくはない。

「なんで辞めたんだ？ 給料にでも問題あったのか？」

「魔王様……………無間様が怖かったとか」

ああ、納得。

巨体で、口が悪くて、群を抜く^{スキル}魔核を持つ魔王となれば、そりゃあ怖いわ。

仕事どころか恐怖で体調崩すな。

「さすがにパン1つじゃな……………あつ」

俺は懐に入っていたミニホットケーキを見て、厨房に向かった。

厨房は食堂から比較的近く、目と鼻の先にある。

着くと、俺の第一声はこうだ。

「汚なつ！？」

厨房は凄いことになっていた。

流し台に散乱している洗われなのまま積み重なっている食器。

清潔感など微塵も感じさせない汚れた壁や床。

ゴミ箱には虫がたかっている。

「十乃字……………掃除もできないのか……………」

苦い表情をしながら顔を引きつらせ、俺は取りあえず厨房から材料を探してみた。

まあ、ご察しの通り何もなし……………と、思いきや。

厨房の床に、小さな鉄の扉があった。

「……………？」

なんだコレ？

俺は両手を扉のつがいに手を置き、精一杯引つ張ってみた。

開くと、そこは地下に繋がっている入り口の様なものが存在した。

「つて寒！？ な、なんだここ……」

入り口からは、溢れださんばかりの冷気がこぼれ出していた。

俺は取りあえず、地下へいくために設置されている梯子を下って行く。

そして、かなり長めの梯子を下っていくと、そこは食糧の倉庫であつた。

冷蔵庫並みの温度で、さながら自然の冷蔵庫といったところか。

「卵、小麦粉、牛乳。なんだ、割と揃ってるな」

妙に真新しい様だが、細目に交換でもしているのだろうか。

コックや召使いが辞めたといつても、此処は魔王城。

もしかすれば、国からの役人が届けているのかもしれない。

俺は必要な材料を、近くにたくさん置いてあつた麦わらの籠に入れ、梯子を上つた。

「よし、一応ホットケーキが出来るくらいの材料は一通り揃ってるな……」

必要な器具も材料も準備完了。

ここからはいよいよ俺の腕の見せ所だ。

卵に砂糖を混ぜ、溶かしバター、牛乳などを混ぜ……。

小麦粉をふるって、粉っぽさがなくなるまで更に混ぜ……。

フライパンに薄くバターを塗り、温める。

そして、温まってきたフライパンの底を濡れ布巾で冷やす。

弱火にして、生地を入れ蓋をする。

ふつふつとまわりの色が変わってきたら、クルリとひっくり返す。

そして、焼けたらフライパンから取出し、皿に移して好みのシロ

ップをかければ完成つと。

ちなみに、今回はリーズナブルにメープルシロップだ。

しかし……やや多めに作りすぎてしまった。

まあ良いか、たまにはこんな朝食も悪くはない。

そう思いながら6枚ものホットケーキを、2枚の皿に3枚ずつ盛り付け、シロップをかけていくと、思わぬ方が後ろから見ている。

いや、この表現だと今気づいたみたいになるな。

正しく言うならば、俺が焼き始め、香ばしい香りが漂ってきた辺りからその方はいた。

クールビューティー十乃字さん、その方が。

なんでいるんだ……。

そう疑問に思うと、あることを思い出した。

十乃字が自己紹介してきたとき、確かにコイツは甘いものが好きといていた。

……まさか、食べたいとか？

「あの……十乃字さん？」

「……！」

十乃字は驚いた猫のようにびつくりし、後ずさった。

……気づかれてないと思ってたのか。

「い、いやなんだ。厨房にお前が行くのを見てな、ほら、料理をす
ると思つてだな。料理は火や刃物がつきもの、お前だけじゃ何かお
こしそつで心配して見に来てやったのだ！」

「俺は子供かいな」

というか十乃字、よだれが垂れてるから早く気付いてくれ。

「そ、それよりその得体のしれない食べ物なんだ！」

「んっ？ ホットケーキだが？」

「ほつとけーき？」

もしかしてこつちの世界には無いのだろうか……。

「俺の世界……お前らのいう迷界アナザーにある食べ物だよ」

「あ、甘いのか？ メープルシロップをかけていたが……」

「まあな。………食べたいのか？」

「た、た、た、た、食べたい訳ないだろうー！」

怒鳴られた。

赤面しながら。

堅物なやつだと思つていたが、中々に可愛い所があった。

ここは軽く悪戯をしてやろうか。

「そうかそうか、食べたくないのか。残念だな、ふわふわの舌触り、香ばしい香り、ほのかで上品な甘みが口一杯に広がる、とー！　っても美味しいものなんだけどな。一口食べたら忘れられない味になること間違いなし。こんなに甘くて美味しいものがいららないんだ。」

俺は盛り付けてある2皿を両手で運びながら、自慢げな口調で十乃字に語り掛けるように食堂に運びながら歩いた。

「~~~~~！」

十乃字は軽く涙目になりながら、何かを言いたそうに口を尖らせ、頬は朱色に染まっていた。

「うわー……相当食べたいんだな……。」

「……………食べたい？」

「……………」

「ついにだんまりだ。」

十乃字は食堂の先ほど自分が座っていた席に座ると、拗ねるように新聞を読み始めた。

「……………はいよっ。」

俺はもっていた片方の皿のホットケーキを、十乃字の前のテーブルに置いてやった。

「！……………。私は欲しいなんて一言も言っていないぞ……………」

十乃字は一瞬驚きと嬉しさの顔で満ちたが、すぐに強情を張って新聞に視線を向けた。

強情を張る前に早くよだれに気づけ。

「……………そうか、実は多めに作りすぎたから食べるのを手伝って欲しかったんだけどな。仕方ない、自分で食べるか。」

ちよつとした演技を見せるが、これでは分かりやすすぎて逆に怒られるだろうか。

完全に棒読みだった。

自分でも呆れるほどの大根役者っぷりだ。

俺は皿を取る様に片手を十乃字の前のホットケーキに延ばすと、

十乃字は素早い動きでホットケーキの皿を俺から守る様にして取り上げた。

例えるなら獲物を死守する獣だろうか。

「し、仕方がないなお前というやつは！ 私も鬼ではない！ 嫌だが！ 本当に嫌だが！ 慈悲深い心で私が食べてやるうじやないか！」

……………そんな嬉しそうな顔で言われてもな……………。

十乃字はおもむろにテーブルに常備されているフォークとナイフを取出し、食べる動作へと移った。

口にそれを運び、ゆっくりと咀嚼していた十乃字は、飲み込んだ瞬間にまたもや眩しいほどの笑顔を見せた。

「~~~~~!!!」

キラキラと瞳を輝かせながらも、その手は動作良くホットケーキを口に運んでいく。

小動物みたいで可愛いな……………。

十乃字はいつもからは想像もできない可愛さに、正直ドキッとしてしまった。

だが、その前に。

自分の料理を美味しそうに食べてもらうと、こんなに嬉しいものなのか。

そんな初めての感覚が、俺の体に流れていった。

「ごちそう様だ」

早っ。

コイツとんでもないスピードで食ったな。

とかいかいつの間にか俺の分まで食いやがってる。

「ふむ、中々悪くなかったぞ」

「正直に美味しかったといえ」

「また手伝ってやらんこともない」

「分かった分かった。また今度作ってやる」

「10人前くらい」

「10人前!？」

こいつ、よつぼど美味しかったんだな。

また機会があれば作ってやるか。

「おっと、ここでお知らせだ」

「? なんだ？」

「早くしないと学校に遅刻してしまう」

「早く言え!」

おいおい、そんな重大なことなんで言わねえんだよ!

第一印象が大切っていうのに、遅刻ってどんだけ悪印象なんだよっ!

「おい! じゃあ早く学校に……ってアレ?」

十乃字は座っていた椅子にはもういなかった。

何処へいったのか。

後ろに振り返ると、食堂の出口には走っている十乃字の背中が見えた。

「おい、急げよ」

……………。

その俊敏さに言葉が出なかった。

いや、今出さなければいけないのは言葉じゃなくて足だ!

俺は十乃字の後を追う様にして走り出した。

恰好は私服だが、あっちで着替えればいい。

教材は学校から受け取れると言っていたし、手ぶらで大丈夫だろう。

今の最優先事項は。

十乃字を見失わないことだ!

「どらああああああ!」

十乃字を追い、城から出、森をぬけ、平地を走り約20分。

そこには魔王の城には負けるが、それでも十分に大きな学校と思われる建物が見えてきた。

「おお、中々に体力があるな」

十乃字はすまし顔で、学校の正門らしき前で腕を組んで壁にもたれかかっていた。

「お……お前……よく……そんな……体力……ある……な……と、……というか……おいて……いく……ん……じゃねえ……!!」
息切れしながら膝に手をつけ、肩を上下に揺らしながら俺は息を整えようとした。

「そう怒るな、ほれ。ここが今日からお前の通う」

十乃字は俺の目の前で仁王立ちし、学園に視線を流すと、ただ一言。

「『国立アーザック王族学院』だ」

ドヤ顔で言われても困る。

1 - 四 類は魔王を呼ぶ!?

『国立アーザック王族学院』

この世界でも名を響かせている、有名学院。

通う生徒は各国の次期魔王候補生、もしくは将来国を担うような仕事を希望する人たちの学院。

文武両道、好学尚武。

まさしく完璧な人間に近づくための学び舎である。

この学院の最も特徴的な所は、誰でも入学できるといふ所だ。

年齢も学歴も職業も身分も一切関係なし。

正に来るもの拒まず、だ。

そのため1年生、2年生のクラスが多く、それぞれ20組まで存在する。

しかし、この学院は留年制度などが無く、単位を落とすと即退学。そのため、3年生の数は普通の平均的学校と同数。

1年生、2年生で退学する人が多いためだ。

様々な施設が完備され、心技体、全てを培える学びの聖地であるこの学院を正式に卒業できたものは、この世界でほとんどが名を轟かせている。

……まあ、全部十乃字からの伝聞なんだが。

そんな学院に今日から通う事になった俺は、期待1分不安9分といったところだ。

羅生門の下人も逃げ出す数字だ。

「どうかな、この学院の印象は(問)?」

俺は学院のとある応接室にいる。

あの後、十乃字と職員室に向かい、担任に会うことにした。

そして、今話している方こそが俺の担任となる人だ。

「表裏言葉（名）。担当は魔法学（教）。君のこれから所属するクラス
の担任になるから、よろしくね（笑）」
痩せがたで長身。

白髪の長髪で、髪と相対するような黒いスーツとネクタイが特徴
の人だ。

喋り方は何処となく変というか……。

上手く自分の言葉を出せてないというか……。

まるで手紙の文面をそのまま読んでいるような。

メールの文章に目を通してしているような。

そんな不思議な話し方。

「こちらこそ宜しく願います」

俺も急いで頭を下げると、先生は突発的に質問をしてきた。

「で、君が魔王の代理人になるわけだが……自信はあるのかい（問
）」

実をいうならば、俺が魔王の代理人を務めると言う事はもうここ
の職員全員が知っている。

十乃字が、魔王がどうなり、どういう意図があったのかを説明し
たからである。

何れ、俺が代理人になったことは各地で知られるようになるだろ
う。

だけれど、しかし。

「自信は正直のところ0です。魔王の代理人など務まるなど思いま
せん。けれども、俺も魔王にならなければならぬ理由があります。
できる限るのことはやり尽くそうと思います」

これが。

俺の本心だ。

「はははっ、そうかい（笑）。まあ、この学院は『魔王』を目指す
ものも少なくないけどねえ（笑）。おっと、雑談をしている時間は
あまりないね（焦）。取りあえず、僕のさっき渡した制服はもう着

てもらってるし、そろそろ教室に向かおうか（急）」

先生はそう言って立ち上がると、応接室の扉を開き、俺を教室まで案内してくれた。

長い廊下に、靴音を響かせながら。

急ぎ足で教室に向かっていった。

まあ、しかし教室に行くときの俺は、少なからずやあることを楽しみにしていた。

『友達』

俺はそれを作れる可能性があったことにやや楽しみにしていた。

元の世界での俺は、生い立ちのせいで周りから敬遠されてきた。

クラスメイトにも、担任にも。

いつも遠目でみられては一人であった。

寂しかった。

胸が苦しかった。

たまに目頭が熱くなり、首元が苦しくなって、一人泣いたこともあった。

それが俺の小学生時代。

中学生になってもあまり変化はなかった。

ただ俺が、一人に慣れただけで。

何も変わらなかった。

田舎の学校だったから、小学生のころと同じやつばかりが中学校にいた。

クラスメイトもほとんど同じ。

だから、俺に友達なんてものは出来なかった。

だけど。

しかし。

今回は違う。

まったく違う。

全てが違う。

生い立ちなんてここには知るものもない。

俺がどんな奴で、どんな過去をもっていて、どんな生活をしてきたなんてみんな知らない。

俺は。

友達ができるかもしれないのだ。

そんなポジティブなことを考えながら、俺は一人胸を弾ませていた。

そして、遂に教室にたどり着いた。

教室の扉についている札には、筆で書かれた文字がある。

『老年七組』

それが今日から俺の通うクラスで。

この世界での新たな学園生活での第一歩であった。

先生が扉を開け、俺も追う様にして教室に入ってしまった。

「おっ、転校生か？」

「入学式からそんなに日がたってないわよ？　なんでこんなときに？」

「何か事情があるんじゃないの？」

教室はざわざわとざわついていた。

「ハイ、静かに〜（注）。今日は皆さんにお知らせがあります（伝）」

「っ、ついに来たか……！」

「ヤバい、緊張してきた……。」

「今日から編入してきた、回座宗谷くん。なんとあの無間様の代理人を務めていて、無間様同等の魔核スキルを持っている、次期魔王候補の一人だよ〜（笑）」

「!？」

「!？」

「!？」

「!？」

クラス全員が騒然となった。

かくいう俺も先生がいきなりの暴露で啞然としていた。

「ま、マジかよ……無間様と同等って……」

「代理人ってどういうこと……まさか無間様の代わりにを務めてたりするの？」

「次期魔王候補って……あいつを下手に怒らせない方がよいな……」
や、ヤバい！

前の世界とは違う空気でみんなと俺の距離が離れていく……！

「では、一時間目は魔法学なので、皆さん教材を準備して10分後に演習場に集合ですよ（伝）」

そういつて先生は教室からでていった。

先生……いつかは知られることでも早すぎる……。

取り残された俺は、先生に予め教えてもらった席にとぼとぼと向かい着席した。

一番後ろの窓側。

普通なら特等席として喜ぶところだが、まったく喜べないのが現状。

机の中には先生が先に入れてくれたらしい教科書一式などが入れられており、俺は『魔法学？』の本を手に取り、先に軽く中身を閲覧していた。

「だ、だれか話しかけてみるよ……」

「いやよっ、私まだ死にたくない……」

「絶対俺はかわらねえぞ……」

ああ、もうダメだ。

このクラスでも友達はできそうにないや。

俺は机で少し残念そうにうつむいている時だった。

「……次……移動」

隣で本を抱えている少女が俺に話しかけてきた。

小柄で幼い顔。

メガネをかけ、目の冴える銀髪のショートカット。

雪の様な白い肌、純粹無垢な瞳。

無愛想な表情で、見た目はさながら文学少女と言ったところか。

普通か美少女と聞かれたら、断然美少女の部類に入る可愛いその少女は。

俺に声をかけてきた。

「えっ、あ、移動？」

いきなり言われたが、そういえば表裏先生が演習場と言っていた。というかその場所すら教えてもらっていない俺であった。

気づけばクラスの全員はとっくに演習場に向かったようで、教室には俺とこの少女しかいなかった。

「……案内……する？」

「あ、その、えっと」

急な親切に驚いてしまった。

というか親切という優しさに俺はあまり慣れていない。

幸運、幸せのようなものに耐性が無い。

あ、ヤバい。

今にも涙腺が崩壊しそう。

逆境には強い方だと思うが、こういうタイプは大抵が成功者にはなれないと自分でも分かっている。

つまり、俺はこの親切をどう受け止めようか、どう感じようか、どう返答するか、皆目見当がつかない。

「……こっち……」

少女は俺を案内するように、教室の出口に立ち、俺に視線をなげた。

「え、あつ、うん」

状況に流されるように俺も席を立ち、その後をついていく。静かな廊下を、こんどは少女と俺は歩いている。

一定のペース、一定の歩幅、一定の靴音。

沈黙……。

……気まずい……！！

ここはアレだろうか、自己紹介した方が良いのだろうか。

しかし、いきなりそんな馴れ馴れしくしたら気持ち悪がられるのではないか……。

「……ディーナ……」

「えっ？」

「……ディーナ・アレクサンドル・グリーナ……私の……名前……」
外国の人であった。

まあ髪の色からは大体想像はできたが。

名前からだとしてロシア人であろうか。

「俺は回座宗谷、親切にしてもらって本当に助かるよ」

ロシア人はみんな親切なのだろうか。

だとすると移住するならロシアだな。

そんな簡単な自己紹介を済ますと、演習場と思われる広い場所が見えてきた。

「……ここ……演習場……」

演習場。

と、いつても森みたいな場所であった。

森林が生い茂り、まるでサバイバルゲームをするのに打って付けな。

もちろんフィールド全てが森林な訳ではない。

オリンピックでも開催できるほどのグラウンドに、何故か射撃場施設にとことん力を入れていた。

「おや、グリーナさんと仲良くなったのですか回座くん（問）？」

表裏先生は点呼をとっているようで、片手にボードを持ちながら、いましがら来た俺たちを珍しそうな目で見てきた。

クラスみんなは、もう演習場に集まっていたが、俺たちがきた瞬間、みんなの雑談が一斉に止まり、こっちに驚きの視線を向けていた。

「……グリーナさんに悪いことしたかな……俺といっしょにいるせいで変な視線を向けられて。」

「同じ候補生同士、仲良くしてくださいね（笑）」

……え？

同じ？

同じって何が同じなんだ？？

「ひよ、表裏先生……同じ……とは？」

間髪開けず、俺は即座に聞き返してしまった。

今日初めて会ったグリーンナさんと、俺の何が同じなのだろうか。

そんな疑問を投げつけると、表裏先生は何を言っているのだろうか？ っと、いう表情で。

ただ質問通り。

端的にこう答えた。

「えっ、まだ聞いてませんでした（驚）？ グリーンナさんは現ロシア魔王の一人娘こと、回座くんとは国が違うけど、次期ロシア魔王候補の一人ですよ（笑）」

1 - 伍 危機一氷

『魔王』

ここで、魔王の役職について再度確認したいと思う。

魔王というのは、いわば国の頂点トピックに立つ人間の役職名である。

政治から軍事など、様々な仕事を担い、絶対的な決定権を持つ。

独裁者でも支配者でもない。

国の代表、国の象徴なようなものだ。

そして、主な仕事の1つ。

『脅し』

この世界でどんな武器、兵器など物ともしない『魔法』。

その『魔法』使うための絶対条件、魔核スキルが優れてなければいけない。

い。

魔王は絶対的な力を他国に見せつけ、『自分の国に攻めたら大変なことになるぞ』という意思表示を行うのだ。

プレデター侵略者からの防衛のため。

つまり、様々な国にも魔王という役職が存在する訳だ。

小国にも大国にも。

弱国にも強国にも。

日本に限った話ではないのだ。

何処の国にも。

魔王は。

存在する。

「ぐ、グリーンナさんって……ロシアの魔王候補だったんだね……」
「……………うん……………」

俺とグリーンナさん（さん付けはいらないうや、ディーナで呼んで欲

しいなどと言われたが、まだそれほど親しい関係でもないし、俺の幸せメーターが振り切れそうなので丁重にお断りさせてもらった。今は演習場で体育座り中。

今日の魔法学は『マナの基本的操作』ということで、クラスの一人ずつがマナを操作し、遠くにある木の的を壊していく、というものだ。

そもそも、『魔法学』というものは、魔法についての理論、構造、使用法など、魔法についての様々な事柄を学んでいくという、この世界では必須科目の1つである。

今回は簡単な練習法で、魔法を使用する感覚を体で覚えるのが目的らしい。

ちなみにマナを操作・変換し、そのあと、どんな魔法になるかは人それぞれで違う。

炎を創り上げ、的を燃やそうとする者もいれば、石を浮遊させ、的にぶつけて物理的に壊すなど、方法は十人十色。

順番は演習場に来た順、ということなので、俺とグリーンナさんはかなり後の方だ。

「はあああ、燃える！」

クラスのある男子がそう叫びながら両手を的に向けて、魔方陣が現れ、そこからかなり弱めの炎が的に向かって放たれていた。

「マナの操作・変換は感覚的に行ってください（注）。その際に、魔方陣などを想像して、魔法をより感覚的に想像しやすくするようにすること（注）。魔方陣は、あくまで補助輪のような役目ですから、難しい魔法、失敗しやすい魔法などにしかほとんど使いませんから、早く無くても魔法が使えるようにしてくださいね（伝）」

表裏先生は魔法について説明しながら、生徒の様子を見ていた。

あれが魔法……。

魔法自体を見るのは初めてではないが、こういう風に落ち着いて客観視するのは初めてであった。

未だに魔法という存在に現実感を覚えていない俺だが、こういう

風に見ていると否いやが応でも魔法の存在を認めざるおえない。

「魔法を使う際、重要となるのが魔核スキルです（伝）。難しい魔法、威力の高い魔法などはマナを大量に消費するので、大量のマナを操れるよう、魔核スキルをしっかりと鍛えましょう。魔核スキルはしっかりと訓練カリキュラムを積みめば、少しずつ強くなっていけますからねー（頑）」

魔核スキル。

魔法を使用する際の基礎中の基礎、基本中の基本。

俺は確か前魔王、無間の魔核スキルを持っているが……。

一体どれほどの力なのか、興味が無いと言えば嘘になる。試してみたいと思う気持ちさえある。

「グリーンナさん、どうぞ（伝）」

気付けば次の順番はグリーンナさんであった。

「じゃあ、頑張れ」

細やかな声援を送ると、グリーンナさんはやや頬を朱に染めてやや速足で指定位置に行った。

調子が悪いのだろうか？

もし本当に具合でも悪ければ、休んでいた方が……。

しかし、そんな考えは次の時点で一転された。

「……………んっ……………」

グリーンナさんが両手を的に向け、静かにまぶたを閉じると魔方阵が出現し、なんとそこから巨大な氷柱が的目掛けて延びていった。

的を勢いよく貫かれてしまった。

……………。

啞然。

開いた口閉まらない。

万力でも閉まらないだろう。

「さすがは次期ロシア魔王候補生、魔核スキルはかなりレベルが高いです

ね（褒）」

今先程の事なのに忘れていた。

グリーンナさんは……………。

ディーナ・アレクサンドル・グリーンは次期ロシア魔王候補生の一人である事を。

グリーンさんはすぐに俺の元に寄って来て、

「……………頑張った」

と一言。

大変頑張りすぎです。

魔王候補生ともなると、やはりここまで常人とは格が違うのか。しかし、だからこそ。

グリーンさんも周りから避けられている。

俺と同じように。

クラスから。

恐れられている。

「では、次、回座宗谷くん（呼）」

「あ、ハイ！」

ついに俺の番が来た。

魔法は初めてだが、演習を行う前に一通り先生が基本を教えられた。

兎に角、俺は教えられたとおりにするだけだ！

一応これでも魔王候補生としては十分の魔核スキルを持っている俺だ。

いきなりグリーンさんまでとはいかなくても、それなりのものはできるはず！

「では、的を破壊してください（伝）」

俺は両手を前に突き出し、的に狙いを定め、そしてゆっくりと思い出す。

……………感覚的に……………イメージ……………想像……………そしてそれを……………創造する……………。

脱力。

とにかく力を抜く。

全身が液化、そして気化する様な感覚で。

余計な力は邪魔になる、一点に集中する。

……！

「はああああ！！」

爆発しました。

爆発といつても『ぼーん』や『どつかーん』という可愛らしい擬音のつくようなコミカルなものではない。

俺が右手を的に向け、エネルギーを放出しようとした瞬間に半径3mほどが小規模の爆発にみまわれた。

情けない恰好で地面を這い蹲ったままで、俺は今にも野垂れ死にしそうな感じに倒れてました。

「大丈夫かい回座くん（爆）？」

表裏先生はそう心配してるように感じられる字面の言葉で問いかけてきたが、思いつきり腹を抱えて大爆笑していた。

（爆）発だけに（爆）笑しているという事だ。

笑えねえ……。

魔法ではなく、今回学んだ事は『爆発してもドリフのように頭がアフロにはならない』というくらいだ。

「……大丈夫……？」

クラスメイトも遠目で見、担任は爆笑している中、グリーンナさんだけが心配して近寄ってきてくれた。もう止めて……そんなに親切にされると本当に泣きそう！！

ちなみに、俺の体は全然大丈夫じゃない。

もろドバドバ血が出ることが見なくても分かる。

「……先生……宗谷……保健室……連れて行く……」

「あっ、じゃあグリーンナさんお願いします（爆）」

いつまで笑ってるんだよ。

よく先生になれたものだ。

俺はグリーンナさんに肩を貸されるような形で保健室まで行くことになった。

やっぱり良い子だな……。

それに比べて俺はなんて情けないことか……。
演習場から出て、また長い廊下になって二人つきり。

ロマンチックとは言えないが、俺は今、とても新鮮な気分だ。
こうして、人に助けられるというのは。

こんなにまで……嬉しいのか。

新鮮な気持ちでもあるが、何かに満たされる気持ちも感じられる。

これが………幸せというものだろうか？

そんな感傷に浸っている時、グリーンナさんはある質問を出してき
た。

「……私と……宗谷………つて………友達………に………なれる………かな………
………？」

幸せゲージが吹き飛んだ瞬間であった。

えっ、今なんて!?

俺と………友達!?

その思いの寄らない質問に、俺は心の中で何かが暴れ出しそうになっ
ているくらい嬉しかった。

俺はグリーンナさんの方を振り向くと、グリーンナさんは恥ずかしそ
うに俯いて、耳まで真っ赤っ赤に染まっていた。

「と、と、友達か〜! で、でもグリーンナさんって王族の人だし、
なれる自信ないなあ〜!」

そんなおどけた事を言いつつ、俺はもの凄く嬉しい気持ちで、頭
をかきながら照れていた。

嬉し過ぎる故の、心にもない照れ隠し。

そういつた感情も気持ちも。

そんな照れ隠しの言葉さえも。

次の瞬間で全て消えた。

「………そうだよ………ね………」
暗く、重く、深く。

グリーンナさんの次に出た言葉は、さっきとまったく違う。
悲しみ。

逃げようとしている道を氷柱で塞がれたり、階段を氷柱で塞いだりなど。

とにかく俺は抵抗できないまま、誘導されるままに走った。
な、何でだ!?

何か気に障るようなこと言ったかな!?

まさかさっきの照れ隠しを聞いてむかついたのか……!

しかし、謝罪する余地などはなかった。

俺はアツサリ追い詰められ、案の定行き止まりの場所へと誘導されていった。

学院で特別教室ばかりで、今現在、ほとんど人気の無い場所まで。

「……安心……して……できるだけ……苦しまない……ように……殺^やる……」

可愛い顔と声してとんでもない事を言うなあ。

しかしそんな陽気なことを考えている場合ではない。

はあ、それにしてもなんかこの世界に来て死にそうになる事多いな。

だが、俺もまだ簡単には死ねない。

抵抗するだけの力を、俺は秘めているのだから。

抵抗できるなら。

生きてやるさ。

格好悪くても、惨めでも、愚かでも。

見つとも無く生に執着してやるさ。

兎にも角にも、俺は真^ま面^もな魔法はまで使えない。

だが、土壇場になって力を使えるかもしれない。

よくあるだろう? 主人公がやられそうになると、内なる力が覚

醒するとか、急に有り得ない力がでるとかのご都合主義。

俺もなれるか分からないけど、責めて自分が主人公と思っ込んで抗ってやるか。

だが、そんな自分の考えをまとめていた時に皆さんご存じ。

十乃字小夜さんが登場した。

登場というより、声がした。

……………えっ？

「おい、お前。何を勝手に死にそうになっている。まったく、手間をかけさせるな」

俺の目の前にあった氷柱で塞がれていた氷の壁が次々と切り崩され、十乃字はその姿を現した。

悠然に。

凜と。

その巨大な大剣を輝かせ、黒髪を靡かせ。

推参した。

……………かつけえ……………。

何処のヒーローだよと言いたかったが、ここではこの言葉は飲み込んでおこう。

「……………誰……………？」

「答える義理はない」

でました名台詞！

十乃字はすかさず飛び上がると、そのまま大剣を軽々と宙で振り上げ、そのまま斬り込みにかかった。

だが、瞬時にグリーナさんの右腕は突如氷で包まれ、その右腕を盾にし、十乃字を豪快に振り払った。

「やはり一筋縄ではいかないな」

十乃字はやや楽しそうに、愉快そうな顔をしながら呟いた。

楽しむな。

お前は戦闘狂かよ。

「おい十乃字！ これはどういう事なんだ!？」

お前が楽しむのは勝手だが、事情が分からないまま俺をほってもらっては困る。

しかし、この後。

十乃字の返事を聞かなければ良かったと思うのは。

時すでに遅し、だった。

「簡単な話だ……こいつが……ディーナ・アレクサンドル・グリー
ナが暗殺者の一人ということだ」

1 - 六 氷降って地固まる

『アサシン暗殺者』

この世界の魔王達が厄介としてしている問題の1つ。

『魔王』つというのはもうご存知の通り、国の頂点トピックであり、絶対な人間。

そして、圧倒的な力を持ち、最低クラスの魔王でも、1人で小国の軍隊くらいなら容易に潰せる。

魔王はある意味、その国の『最強者』でもあるのだ。

最強者で最恐者。

常人とはかけ離れている存在。

それが魔王の定義であり、魔王の概念だ。

だが、その最強者も常に無敵な訳がない。

人間、隙は必ず生まれる。

病気で弱つてるところ、仕事で忙しいところ、もっと言えばトイレで用を足している時や入浴中の時、寝ている時なども隙だ。

そんな隙を突き、敵国の……侵略者ブレデターの暗殺者アサシンは魔王を殺してくる。

侵略しやすいように。

自分の国を栄えさせ、豊かにするため。

他国を喰う。

侵略者ブレデターは。

暗殺者アサシンは。

魔王を殺す。

「……グリーンナさんが……暗殺者……？」

初めてクラスで話しかけ。

優しくしてくれて。

友達になろうとまで言ってくれたグリーンナさんが……。
暗殺者。

俺を殺しに来た。

俺を葬りに来た。

暗殺者。

頭が回らなかった。

その事実を理解しようとしたくなかった。

全身から込み上げてくる何らかの感情を認めないまま、動きを止めた。

「何を突っ立つてる、隙を見せるな。殺されたいのか」

呆然と突っ立つてる俺に比べ、十乃字は落ち着きながら、相手を威嚇するように睨めつけながらその巨大な大剣を構えていた。

「……邪魔………そこ………退かないと………殺す………」

グリーンナさんはその威嚇に臆する様子はなく、真顔で、平坦に、普通に、そこに佇んでいる。

「お前が私を殺す？ 魔王候補生でもよくそこまで自分を過大評価できるのかと逆に感心したくなる」

「……… 『氷姫締結』………！！！」

またもやあの魔法。

『ツンドラバーン氷姫締結』。

書物室でこの魔法を俺は見たことがあった。

確か、空気中の水分子の運動をマナで停止し凍らせ、様々な氷を作り出す氷系中位魔法。

手元の魔方陣から千変万化、変幻自在に氷を生み出しす恐ろしい魔法。

氷系下位魔法と違い、氷の精製速度、操作率までが段違いだ。

本来、この学園ではスキル魔核を訓練で進化させ、カリキュラムレベルアップ参年から中位魔法を教えている。

しかし、そのはずなのに。

グリーンナさんはいともたやすく。

それを使用していた。

さすがは次期ロシア魔王候補生と言ったところだ。

今の今まで俺は、あの魔法からできた氷柱に、何度刺殺されようとなつたか。

その魔法が、今、氷柱ではなく。

魔方陣から生まれたのは……氷像の騎士であった。

「ほう、氷をそこまで巧みに操れるとは。さすがは魔王候補生と言つておこうか」

「……長期戦は……私に……不利……一気に……片を付ける……！」

氷像の騎士は、見た目では想像も出来ないほどの速度で床を滑る様に走りだし、気付けば十乃字の首に、腰に下げていたはずの剣で斬りかかろうとしていた。

騎士の全長は約2m、全身に冷気を帯び、恰好は西洋の騎士を想像してもらつて構わない。

問題なのは。

その2mもの重量級騎士の速度が、
早すぎる。

「……！」

十乃字はかろうじて大剣で一撃を受け止めたが、騎士の斬撃の雨は止まない。

騎士の

刃と氷刃の斬撃音がここまで聞こえる。

騎士はその巨体で上方から十乃字に斬撃を浴びせているのに対し、十乃字はその速度についていけないまま防御に徹している。

防戦一方。

騎士の一撃一撃は、離れて見ている俺でも分かる。

鋭く、重い一撃だということに。

「ふむ……なるほどな、聞こえるか馬鹿者」

「恐らく俺のことだと思うのでスルーしたいのは山々だが、そんな状況じゃないから返事してやる！ どうした！」

「おそらくこの女、騎士を操っている間はその氷柱も出せないようだ」

両手で支えている大剣で騎士の斬撃を受け止めながら、十乃字は焦りながらもそう言った。

確かに、今グリーナさんは両手で2つの魔方陣を作りながら、騎士を操っていた。

「氷のここまでの巧みな操作、やはり集中力がいるのだろう。恐らく騎士を操作している間、あの女は動けん。お前はその間に……あの女を殺せ」

！？

予想だにもしない言葉が飛んできた。

俺が。

グリーナさんを。

……殺す。

「迷うな！ 暗殺者は殺す！ 生かしておいたらまたお前を殺しにくる！ 僅かな禍根も残さず殺すんだ！」

殺す。

俺は。

殺すのか？

グリーナさんを。

この手で。

迷うなと言われても迷う。

俺は今まで偽善に会ってきたから分かる。

あの優しさは………偽善ではなかった。

本当に心の底から、純粋に、汚れなく俺に親切を向けてくれた。

そんな初めての親切を向けてくれた彼女に。

俺が手を下すなんて。

辛すぎた。

しかし。

そんな戸惑いに迷っている時に。

十乃字は 斬られた。

十乃字の背中からは、少しずつ血が滲みだし、その背中の傷跡は痛々しく見えてきた。

「!?! 十乃字!?!」

俺は本当に馬鹿だ。

十乃字の言った通り、馬鹿だった。

何故気付かなかったのだろうか。

あんなに堂々と見えていたのに。

グリーナさんの使用している魔方陣は2つ。

つまり。

騎士が。

もう一体いても。

おかしくない。

勝手に2つの魔方陣を使って一体の騎士を操ってるなんて、俺が勝手に思い込んでいただけであった。

巨大な氷柱に隠れていたそのもう一体の騎士は。

無感情に。

無感覚に。

ただの動作として。

十乃字をいきなり背後から斬りつけていた。

「!?! 私としたことが!?!」

十乃字は痛みで顔を歪めそのまま倒れるようにひざまずに跪いたが、すぐに大剣を一旦投げ捨て、片足で床を思いつき蹴って走りだし、2体の騎士から距離を取った。

「..... 負傷者一名..... 魔王代理人一名..... 楽に..... 殺せる.....」

グリーナさんは相も変わらない無表情で、ゆっくりと歩み寄ってきた。

俺たちを殺そうと。

ゆっくりと。

近寄ってくる。

だが、俺はそんな事に恐怖を感じることは出来なかった。恐怖を心に入れる隙間がない。

今の俺の心の中は。とにかく乱れていた。

十乃字が斬られたのも主な理由だが。

もう一つの理由は。

女の子が……。

「……………女の子がそんな事してはいけません!！」

ここで話すなら、俺は魔王城も書物室である一冊の興味深い本があった。

『子供の遊び全集』

正直、この本を手にとったときは読まなくても良いのではないかともし本棚に戻そうとも思ったが、その時の俺は情報に飢えていた。

まあ今もだが。

一心として、俺はその本を開いたとき。

そしてそれを読んだとき。

俺は1つだけ。

1つだけだが。

1つの魔法が使えたのだ。

『ストレート魔拳』

この魔法は、魔法よりも子供の軽い遊び技なのだが、内容はこうだ。

【ストレート魔拳 : マナを操り、拳にエネルギーを纏わせ、葉っぱに

触れる。相手より遠くに葉っぱを飛ばせれば勝ち】

と、いう単純な遊びだ。

単純で簡単、実にシンプル。

だが、だからこそマナ操作も簡単。

マナを変換しなくて良い。

マナを難しく操作しなくても良い。
単純に、マナというエネルギーを。
拳こぶしに纏まとうだけだ。

そして、対象物にぶつけるだけ。
操作・変換が子供以下の俺でも。

この魔法は 使える。

俺は拳こぶしにマナを纏まとい、そのまま騎士を殴り。

粉碎した。

粉々に。

氷の欠片にしてやった。

綺麗な光輝く欠片に。

「！ なんて……………騎士……………硬さは……………鉄並……………のはず……………！」
無表情のグリーンナさんも、さすがに騎士を壊されるところを見た瞬間、表情に少しの焦りが見えた。

片方の騎士が倒れると、グリーンナさんの手元の魔方陣は1つ消え、そして騎士の氷の欠片は霧のようになり、空气中に消えていった。

「……………魔法……………使えない……………はず……………！」

「誰も1つも使えないなんて一言も言っていない。俺が唯一使える魔法、『ストレート魔拳』」

「ストレート魔拳……………子供向けの遊び魔法だが、さすが無間様のスキル魔核なだけはある。威力が桁違いだ」

十乃字もやや驚いているような顔をしている。

「……………まだ……………負けてない……………！」

グリーンナさんはもう一体の騎士を操作し俺に斬りかかろうと、さらには片手でもう一つ魔方陣を創り上げ、またもやあの変幻自在の氷柱を繰り出してきた。

騎士の持つ剣こぶしは俺の心臓に、巨大な氷柱は俺の頭目掛けて貫こうとしていた。

だが、無駄だ。

騎士の動きと氷柱の軌道は、グリーンナさんの焦りのせい動きが

単調すぎる。

ただ真つ直ぐに突っ込んできてるだけ。
なら。

その軌道上を。

拳こぶしでぶん殴れば良い……！

俺は両拳に『魔拳ストレット』を発動し、そのまま。

ぶん殴った。

「おらぁあ！！」

騎士と氷柱は案の定、轟音を轟かせ、崩れていった。

粉碎され、跡形もなく。

崩壊。

両方とも、綺麗な霧となって消えていった。

名前の通り、ストレットなストレットパンチ。

変化の無い技なんて怖くなどない。

「……………！！」

グリーンナさんは一瞬ひるんだが、更に魔方陣を創り上げようとした。

また騎士か、それとも氷柱か。

俺は次の攻撃に対して構えた。

が、その行動は意味は空振りに終わる。

グリーンナさんが 倒れたからだ。

ふらりと。

全身の力が抜けたように。

冷たい床に倒れていった。

「……！ グリーンナさん！？」

俺はグリーンナさんの元に駆け寄ると、グリーンナさんは息を乱しながらかなり疲れきっていた様子で気絶。

「……別段体力がない奴だったんだろう。魔法を使えば使うほど、難しければ難しいほど疲労がたまる。単に疲労が限界にきただけだろっ」

十乃字は背中から血を先程より滲ませながらこっちに近寄ってきた。

「お、おい！ お前は歩いて大丈夫なのか！？」

「問題無い、これ位すぐに完治する」

化け物がここにいた。

こいつは妖怪の類か？

「それよりこの女だが……放っておくには危険すぎる。やはり今すぐにも殺す」

「帰ったら好きなだけホットケーキを焼こう」

「さなくとも良いだろう。一旦保健室に連れて行き、回復後、尋問を開始しよう」

ふう、甘いものに目の無い奴だが、これから説得する際はこれで行こう。

さて、早くグリーンナさんを運ばなければ……

俺はグリーンナさんに肩を貸すような形になりながら保健室に連れて行くことになった。

……よくよく考えれば、現実問題、俺は演習場で怪我をして、グリーンナさんに連れて行って貰っていた途中なので、俺もそれなりに怪我に痛みが走っている。

ちなみに、十乃字は『今日は家庭科で甘味物の作り方を実習のために学ぶ日だからアウト』と言い残して教室に帰った。

猫の手ならぬ十乃字の手も借りたいが、あいつは戦闘くらいしか役に立たないのか……。

あいつの頭の中の等式は甘いもの<甘いもの以外で構成されているな。

ところ変わって保健室。

その後、俺とグリーンナさんは保険医の先生に演習場で負った怪我

と言ってそれなりの手当てを施^ほしてもらった。

「……………」

グリーンナさんは只今ベッドで絶賛睡眠中。

ちなみに、俺はその近くで椅子に腰かけながら様子見。

いや、別に女の子の寝顔見たさで残ってるんじゃないぞ？

ただ保険医の先生がすぐに出張に行ってしまったから、ちょっと心配になって見守っているだけだ。

……………」

それにしても、こんなに小柄で華奢な子に俺はさっきまで殺されようとしていたなんて。

想像もできない。

思いにもよらない。

俺が過度のMマなら興奮しているところだが。

生憎あいにく、俺はMマではない。

「……………なんで……………私……………が……………ここに……………いる……………」

気付けば、グリーンナさんはいつの間にか静かに目を覚ましていた。体をおこし、そのまま俺を見た瞬間睨むようにそう言った。

「……………殺さない……………なら……………私……………が……………！」

魔方陣を組み上げようとしていたが、今の彼女の状態では到底無理だろう。

その前に、俺には言う事があるしな。

「別に、殺す気は無いし、殺される気も無い。ただ、1つお願いがあるんだ」

「……………」

グリーンナさんはまだ睨み付けているが、気にせず言ってやる。相手の心情を無視してこの言葉を投げつけてやる。

こんな文面じゃ俺がさながら、MマというよりSサドっぽいな。

まあそんな事は今はどうでもいい。

ここから先は、大切なことだ。

大切に。

重大な。

返事。

「俺と友達になってください」

俺はグリーンナさんと友達になってやる。

1・七 一難去って今度は四難

『人間』

人間というのはとても弱い生き物だ。

弱くて弱くて弱くて。

とても一人じゃ生きられない哀れな種。

だから人間は集団になる。

一人じゃ生きられないから。

『助け合い』と、綺麗な言葉を並べる。

集団で生き、集団の中で生活する。

それが人間。

これが人間。

だけど、こういう方法を取ると。

人間たちは残酷な行動をとる事がある。

『疎外』

異質なものを除外しようとするのだ。

いじめ、なんかも同じ。

異質なものに行動を移す。

弱いから虐めて自分の欲求を満たす。

気持ち悪いから除け者にして自分の気持ちを安心させる。

俺も同じ。

周りから貧乏だからといって、係わられない様にされてきた。

確かに、親無しの貧乏な奴と係わっても良いことなど無いのか

もしれない。

むしろ、金銭関連で何かされるかもしれない。

もちろん逆もしかり。

あの子は喧嘩が強いから離れておこう。

あの子は偉い人だから近寄らないでおこう。

まあ、逆のパターンは少ないが。

それでも無いことは無い。
例えば……王族ならどうだろう？

「……………」

ぼかん。

そんな擬音語が実にしっくりくる表情で固まっていた。

「……ふ、…ふざける……な……！」

すぐに我にかえったグリーンナさんは、俺の言葉を絶つように否定して、戯言扱いした。

だが、これは戯言ではない。

だから。

「ふざけてない。もう一度言う、友達になりたい」

すぐにそれを否定してやった。

これは俺の真意であり、正直な気持ちである。

正直の気持ちを言葉にした。

その俺の言葉に、一切の嘘偽りは無い。

「俺も実は友達と言える友達がいない！」

自信満々に言っちゃった。

えっへん。

「……………」

「つまり、さっき友達になれるかなって聞いてくれたじゃないか。

その返事として受け取ってくれ」

「……王族……とは……友達……になれない……って……言った……………」

「すみません、照れ隠しです」

取りあえず土下座。

そつえばその様な事を申し上げていました。

照れ隠しで傷つけてしまったなら、誠心誠意、ここは土下座。

自分のプライドのなさを再度確認してしまうが、相手を傷つけてしまうようなプライドは即行廃棄する。

「……じゃ……じゃあ……宗谷……私……と……友達……？」

「yes」

「ここは即答。」

まあ、友達は気付いた時にはもう友達、つと言う人いるけれど、案外それは難しいと思う。

俺は友達と思ってるけど、彼はどうなんだろう……って考えていたら、実は相手もそんな事思ってたりする場合もあるわけ。

言葉にして相手に伝え、そして相手も認めて、友達。

これが一番手っ取り早くて、スマートだろう。

俺の場合は迷わず即答。

まあ望んでることなんだから当たり前なのだが。

「と……友達……」

「そうだ、俺がグリーナの友達だ。いつしよに馬鹿なこととして、休み時間には適当などうでもいい会話して、昼休みはいつしよに食べるんだ。そうだ、休みの日はどっかに遊びに行くこともできるぞ？ なんなら買い物にでも付き合えるし、美味しいものでも食べに行くこともできる。そんな、『友達』だ」

「……………」

「おっ、良い事思いついた。今度、城うちに来いよ。こつ見えても、料理には自信があるんだ。好きなものあるか？ まあ俺の知らないものならレシピを調べなきゃならないんだが……」

「……………」

「勉強を教え合っつてのもいいなあ。でも俺の方が教えられてばかりになりそうだなあ……魔法なんか全然扱えないし……はははっ……」

「……………」

まあ、これ等の『友達』のすると思われる行動は俺の理想でもあるのだが。

友達ができたらやりたいこと。

子供から俺が夢見た事。

きつとグリーンナさんも友達といたらこれ等を思いつくと思うんだけど……。

と、ここで異常事態が発生した。

緊急事態だ。

エマーゼンシーだ。

グリーンナさんが無表情のまま泣いています。

……。

！？

な、何故！？

「え、あつ、あの！？」

なんで泣いているのだろうか！？

理由が分からない！

What!?

どうしよう！

ここはハンカチを渡すのが紳士的な行動……ハンカチ忘れた！！
というか、制服に今日着替えたばかりだから自分の服をそのまま
ロッカーに閉まってある！

どうしよう！

つと、いうことはポケットティッシュさえもない！

「……私……昔……学校……嫌い……だった」

内心大混乱の状態だった時、グリーンナさんはおもむろに自分の昔
話を初めた。

いつも通り消えそうな声で。

消えない様になっている声で。

「……？」

いきなりの昔話の開始に戸惑ったが、一旦話を聞くことにした。

「……私は……王族……だから……みんな……離れる……。……誰

も……話して……くれない……遊んで……くれない……」

王族。

そういえば、グリーンナさんは次期魔王候補生であり、現ロシア魔王の一人娘……つまり由緒正しい王族。

確かに王族と友達になろうなんて馴れ馴れしい人間はそういないだろう。

いや、ほほいないだろう。

王族だから、特別だから。

人は……離れてしまう。

貧乏だから友がいない。

王族だから友がいない。

似ていないようで、境遇は俺と似ているのかもしれない。

「……毎日……一人……友達……遊びた……かった……。……そんな……事……思いながら……日が……経って……そして……この学園……で……宗谷……出会った……」

「俺？」

まさかの俺登場。

「うん……宗谷……同じ……次期魔王……候補生……友達に……なれる……って……思ってた……」

涙。

彼女は俯きながら、瞳からは涙が次々とこぼれていた。頬を伝い、その涙は止まらず落ちていく。

俺と全く違って。

全く同じの事を感じてきた彼女に。

俺は、気持ちを通じたような気さえあった。

彼女は友達が欲しくて。

グリーンナさんも。

誰かと馬鹿なことして。

適当な会話をして。

休みの日に遊んだりして。

そんな普通の友達が……俺と同じで欲しくて。

俺に話しかけた。

同じ針のむしろの俺に。

「……宗谷……王族と……友達……なれない……って……言ったとき……悲しかった……な……」

「がっ!? いやっ、だからそれはっ!」

やはり許してくれないのだろうか!?

仕方ない、ここは必殺ローリングダイブザ土下座で謝罪を……!

「……わかってる……照れ隠し……それに……」

「……それに?」

「……今は嬉しいから……良いよ……」

頬を朱に染め、あの無表情の彼女が、うつすらと、微かに……微笑んだ。

柔らかく、優しい微笑みを。

俺に向けてきた。

窓から差し込む光が、彼女の銀髪を美しく光らせ、まるで天使をこの場に描いたような。

可愛さと。

美しさ。

「!?!」

な、なんだ!?

微笑んだ瞬間心臓が跳ね上がった!!

鼓動の速度が半端ない!!

ま、まさかこれが噂に聞く……『恋』!!

「……一生……友達……でいて……ね?」

「あっ、それはもちろん!」

俺の恋(?)は5秒以内で終了した。

「……あと……これからは……と……と……友達……だから……『ディーナ』……ねっ?」

一度提案された下の名前の呼び捨て。

友達としてなら、やはりここは呼称は下の名呼び捨てなのだろう

か。

しかしここで断つたら男が廢る。せつかくグリーナさんが耳まで真っ赤にして俯いてもじもじしながら言ってるのに、ここで断つたら俺は人間ではない。

というか萌えました。

なるほど、これが萌えか。

体が燃えそうだ。

もえだけに。

「じゃあ、これからはそう呼ぶとするよ。えっと、宜しく、ディーナ」

「……うん……宜しく……ね……宗谷……」

友達が出来た。

正直、すぐにでも飛び上がりたい気持ちだが。

まだ。

問題はある。

忘れてはダメな問題。

このままハッピーエンドで終わってはいけない。

重要な問題。

「じゃあ、ここからは個人的なお願いというか……ディーナの友達として聞きたい。なんで俺を暗殺しよう？」

一人として。

一人の友人として。

ディーナには聞かなければいけなかった。

「……宗谷……もう……友達……全部……話す……」

問いかけると微笑みは真面目な顔……真剣な顔に変わり、その問題について返答するように、ディーナは語ろうとする。

雰囲気は一転。

ついに語られる……俺の暗殺について。

「……私の……場合は……実は……国……『ロシア』……は……一切……関係して……いない……」

関係ない？

つまり、ロシアは日本に対して侵略活動を行おうとしていない？

「……『ロシア』は……『ピースヘース平穩者』……他国……侵略……しない……」

……テストメントただ……テストメント生徒会の……命令……」

「生徒会？」

生徒会ってあれだろ？

学校の行事とかなんやかんや仕切ってる、中高等学校の設けられる組織。

そんな学園の生徒が集まってるだけの組織に命令された？

「この……学校……の……生徒会……メンバー……全員……次期魔王……候補生……」

「……？」

「……？」

ぜ、全員！？

魔王候補生が簡単になれるものじゃ無い事くらい俺でも知ってるけど。

全員が候補生。

頭脳が秀ひいでて。

身体能力が高く。

魔核スキルのレベルが高い。

次期魔王候補生。

生徒会は……その候補生なのか。

「……生徒会……命令……絶対……逆らったら……事故死……という……ことで……殺され……る……」

この学園で事故死は珍しくないらしい。

魔法学の実習による死亡件数が一番多いらしいが、それ以外での負傷件数の数もなくてはない。

ディーナはシートを力強く握り、とても悲しい顔を浮かべた。

嫌なことでも……やらなければ……殺される……。

そんな非人道的な事が……学園内で……

「……生徒会……は……学園内で……相当な……発言力……先生……」

「……なんて……関係ない……生徒なんて……簡単に……殺せる……」

「……だからディーナは俺を……殺そうと……」

「……ごめん……なさい……死ぬの……怖かった……」
震え。

小刻みに、震えている。

ディーナは死と。

隣り合わせだった恐怖を。

一人で背負いこんでいた。

「……死ぬは誰でも怖い、ディーナは全然悪くない」

ディーナに非は無い。

むしろ非があるのは……テストメント生徒会……。

「……ここ……からが……重要……」

ディーナは、その口から。

その言葉を口にした。

吐き出された言葉には。

俺の未来が。

少なくとも明るくはならないだろう情報であるのは。

間違いない。

「……私は……暗殺者……でも……私が……確認……できて

る……だけ……でも……あと……生徒会に……命令されて……いる

……暗殺者……」

ディーナは一度止めるように、しかし現実を受け止めるように。

それを。

言った。

残酷な。

現状を。

「……4人……いる……」

1・八 魔王の一声

『テストメント生徒会』

国立アーザック王族学院のエリートの中のエリートが集い。

様々な国の次期魔王候補生で組織されている、学園内で絶対の存在。

会長。

副会長。

書記長。

会計長。

庶務長。

この5つの役職に一人ずつつき、そしてこの五人こそが。テストメント生徒会を統率している正体である。

さらに、役職ごとに部下も存在している。

書記長には書記が数名部下として存在し、会計長や庶務長にも数名の部下が存在する。

『部下』といわれるが、決して低レベルではない。

知力、体力、スキル魔核。

全ての内のどれか1つでも特定のボーダーラインを越えていなければ、『部下』扱いなのだ。

それだからこそ。

逆を返せば。

全てにおいて、生徒会の5人は。

ステータスが桁違い。

そして恐ろしいことに。

部下以外は全員。

次期魔王候補生。

圧倒的発言力、権力、そして………純粹なる『力』を携えている。表ではやり手の組織。

裏では殺り手の組織。

その様な恐ろしく、恐怖する対象が。

何故か。

何の因果か。

俺を。

殺そうとしている。

「ホットケーキはまだかつ！」

「……まだか……」

「まだじゃあ！」

現在、俺は厨房で作業、十乃字とディーナは食堂でまだかまだかと騒いでいる。

あの後、ディーナは疲労のため1時間目以外の授業は全部欠席し、保健室で休んでいた。

かくいう俺は一応授業を受けに教室に戻ったのだが、やはり周りからの疎外感は否めない。

2、3、4、5時間目が終わり、そして最後の授業。

6時間目は担当の教師が急な病気のせいか欠席で自習。

俺は友達として（ここ重要）、友達として（ここ重要）、友達として（ここ重要）！！

ディーナの机からノートを取り出し、俺の取っていたノートを写していた。

決して、やましい心など無く、友達としてノートをとってあげているのだ。

少し余計なお世話かと思っただが、一応やっておこう。

で、授業が全て終わり、放課後。

俺はディーナの様子を見るべく保健室に向かったのだが、会うな
りいきなり

「……………友達……………だから……………さっそく……………御馳走……………になる……………」

と、言い出した。

確かに料理を振る舞うといったが、ここまで早いとは……………まあ良いのだが。

十乃字はどうせまたパン一つという落ちが見えるし。

夕飯はホットケーキにでもしようと思う。

十乃字はどうせ食べたいと駄々をこねそうだし、折角だからデイナーにも食べて貰いたい。

それに。

あの話もある事だし。

あの話。

つまり、俺の暗殺の兼の事なのだが……………。

「まだかー！ー！」

「……………まだ……………かー……………」

「今出来たから静かにせい！ー！」

この調子で五月蠅い。

ちなみに今は夜。

本当ならご近所迷惑になるところだが、魔王城の近くに「ご近所さん」というものは存在しない。

一番近い建物でも、あのアーザック王族学院くらいだ。

即ち、すなわちいくら叫ぼうが暴れようがあまり関係ないのだが……………。

「さっさと持ってこんか！ー！」

「……………こんか……………」

「黙れっ！俺の耳の迷惑だ！」

俺の身体に関係ありそうだ。

なんか急に賑やかになっとな。

俺は厨房からトレーを急ぎ足で運びながら食堂へと入り、二人が座っているテーブルへと向かう。

そこには仲良く会話しながら楽しそうな女子二人。

……いつからあんなに仲良く……。
ちよつと寂しい俺がいた。

「ほれよ、ホットケーキ。朝とは違って時間があつたから本気で作
つてやったから、味わつて食えよな」

2枚の皿に3枚ずつホットケーキをのせ、その上にバター、そし
てメープルシロップ。

作り方も更に拘つた、中々の一品だ。

「ひくは〜！！ ホットケーキちゃん朝以来の対面じゃねえかよお
〜！！」

「おい十乃字。テンションが上がりすぎでキャラ変わつてんぞ」

最初の『ひくは〜』なんて、どこぞの世紀末を想像してしまった。

「……これ……ほつと……けーき……」

「そう、口に合うか分からないけど、まあ食べてみ」

打つて変わつてディーナは、初めて見る食べ物にやや戸惑いなが
ら、ナイフで切り。

フォークで刺して口に運ぶと……。

目を輝かせながら、次々と口に運んで行つた。

というか食べ始めてからディーナ、喋る暇なく食べてるな……。

三点リーダーの数が半端ない。

ここまで美味しく食べて貰うと、料理人冥利に尽きる。

「ふう、ごちそう様」

相も変わらない早さ、十乃字小夜さん。

味わつて食えつて言つただろうが。

「……………ごちそう様……………」

こつちも早かつた。

えっ、何？

こつちの世界は早食いが主流なの？

だとしたらとても消化に悪い世界だな。

「はいよっ、お粗末様でした」

2人の皿を回収しトイレに乗せ、一旦厨房の流し台（仮）に置きに行った。

というか現実問題、この厨房も何時か掃除しないとない……。

それまでこの流し台（仮）を、俺は流し台とは認めない。

これが流し台ならトイレも流し台だ。

皿を置き、すぐさま食堂に戻り、俺は二人の座るテーブルの椅子に腰かけた。

二人の顔を見ると、先ほどとは打って変わって真面目そのもの。

軽い空気など何処にも漂っていない。

これから話されるのは。

……暗殺について。

「ではまず、グリーンナは生徒会に命令され、仕方なしに暗殺を行った。そして、後4人。暗殺を試みようとしている奴がいる……。現在の状況はこれでいいな？」

十乃字は俺が座つたのを確認し、すぐさま軽く現状をまとめて、要点を掴んで説明した。

「ああ、その通りだ。それにディーナとはもう友達だ」

「……友達は……殺さな……い……」

「ふむ、まあそこは良いとして。問題は……。」

「4人の暗殺者、だな」

「そうだ。そこを何とかしないといけないが……。グリーンナ、お前はその4人について知らないのか？」

確かに、ディーナは俺を殺せと命令されたのだ。

その際、生徒会に一斉召集されてもおかしくはない。

何か手がかりとあるものがあれば。

俺を暗殺する人間の顔が割れば。

こっちからアクションをかけることも可能だ。

「……二人だけ……顔は……見たことある……少しだけ……会話……」

…した」

「おお、何年生の何組かわかるか？」

「……………分からない……………ただ……………」

「ただ？」

ディーナは何か煮え切らないような表情で言いにくそうに。

何か言いにくい事でもあるのだろうか？

もしかして……………テストメント生徒会に口止めでも……………！

「……………変態と……………ヤンキー……………」

「……………変態と」

「……………ヤンキー」

変態とヤンキー。

……………俺はそんなやつらから命を狙われているのか……………。

何か嫌だ。

「よし、ヤンキーはともかく、変態は見当がつく」

「つくのか！？」

十乃時め、とんでもない事言い出しやがった。

なんでつくんだよ。

「恐らく……………忒年耄組、『貝塚灰樹』かいづかはいき。そいつで間違いないだろう」

「貝塚灰樹……………誰だその人？」

「学院では結構有名な方だ。女に普通にセクハラ行為やセクハラ紛

いの発言を行ったりするド変態で有名な変態野郎だ」

……………俺、そんな奴に命を狙われてるんだ……………。

というか、なんで生徒会はそのような奴に暗殺命令出してるんだよ。

俺は変態でも殺せるとでも思っているのだろうか。

だとしたら、即刻生徒会を潰すべきだ。

「ちなみに、貝塚は女なのか？」

「女がこんな事をするはずないだろう……………もしそんな事を思い込ん

でるなら、全世界の女性の皆様に土下座しろ」

「い、いや、確認で聞いただけだろ！」

「本当か？ 実は女と期待して、興奮していたんじゃないか？」

「……宗谷……えっち……」

十乃字とディーナはジト目でこっちを、汚いものを見るような目で見ている。

な、なんと心外なっ！！

俺は紳士だ！
ジェントルマン

そんな事を考えるはずもないだろう！！

「……まあ、それは置いてだ。貝塚は変態だが、もちろんただの変態ではない」

「ん？ ただの変態じゃないって……」

「IQ200以上、異常なまでの成績を残し、全ての学界には奴の爪痕が存在する。学院内の歴史から見ても稀にみない優秀さを発揮し、世界で五本の指に入る天才の中の天才。テストでも常に1位を独占している、大天才だ」

「……！」

変態の癖に天才だと！？

くっ、濃すぎる……キャラが濃すぎるぜ……！！

「一応、次期日本魔王候補生の一人になるはずの男だった」

「？ なるはずだった？」

「あいつは次期日本魔王候補生を辞退したんだ。理由も分からずじまい。とにかく分からない男だ」

次期魔王候補生を辞退。

言い換えれば、そいつには魔王候補生並みの力が備わっていると解釈できる。

「……大体そいつについては分かったが、どうするんだ？」

「もちろん、明日。奴に会いに行く」

やっぱりそうなるか……。

貝塚灰樹……一体どんな奴なのだろうか……。

何にせよ、俺を暗殺する人間だ。

注意は必要だな。

「というか、もうこんな時間か……」

食堂に備え付けられている掛け時計（無駄にでかい）の針を見ると、もう10時を回っていた。

外は完全に夜の帳が降り、梟の鳴き声も微かに聞こえてきた。

「ディーナ。もう遅いし、そろそろ帰ったらどうだい？」

「……………うん……………そうだね……………」

……………あれ、なんか……………？

ディーナは言われたくないことを言われたような。

急に寂しい顔つきになった。

そういえば今日の演習場で、順番待ちの時に会話した内容を思い出した。

演習場、俺とディーナはかなり順番が後だったため、適当な会話をしていた時。

ディーナは自分が今住んでいる所について話してくれた。

ディーナはロシアから単身でこの学院に来て、一人でこの学院の寮に住んでいる。

基本的に寮は3人での相部屋なのだが、次期魔王候補生は特別待遇。

大きな部屋を一人で独占できる。

しかし。

ディーナにとってそんなの嬉しいはずがない。

毎日一人で起きて。

一人で朝食を作って。

一人で食事して。

一人で登校して。

一人で下校して。

一人で夕食を作って。

一人で食事して。

そんな毎日の繰り返し。

友達が俺達以外いないうえ、この一人生活は寂しいだけでしかない。

そして、そんな生活を経験していた俺だからこそ。
涙が止まりません。

「ディーナーっ……！」

俺は号泣しながら、帰り仕度をしているディーナの肩に両手を置き
「城でみんなに住まないかつ……！」

そう叫んだ。

ディーナの立場がもし俺だと考えた瞬間、一番嬉しいと思うこと
を考えた結果。

この城でいつしよに住むことが第一にあがった。

「……えっ……その……良いの……？」

ディーナは喜びの表情を浮かべたが、その前に戸惑っている。
それはそうだ。

急に住めといわれても困るだろう。

だが。

しかし。

是非、ディーナには同じ針のむしろとして。
城に住んでほしい。

「良いに決まってるじゃないか！ 友達だろ！」

「おい、何を勝手に言っている！ 前に言ったと思うがここは魔王
の職場兼住居で、決してアパートなどではないぞ……！ 第一、他国
の魔王候補生を住まわせるなど」

ちっ、やはり十乃字の阻害が入ったか……！！

しかし、喰らえ！

必殺の呪文を！

「朝食はこれからホットケーキにしよう。更にご希望ならこっちの
世界の他の甘い食べ物もたまに作ってやろう！」

「素晴らしい国際交友じゃないか！ 早速、私が明日から職員
にグリーンナの寮の退寮手続きなどを済ませて行おう！」

十乃字はちよろかった。

まあ、朝食はどうせ簡単なもので良いし、ホットケーキは意外に

作るのは楽だ。

それに、これでも村に唯一存在していた本屋に置いてあった『週刊【家庭の友】』を毎週欠かさず読み（もちろん立ち読み、本屋のおっちゃん嫌そうな顔は忘れられない）、そして様々なレシピを会得した俺の脳内料理ブックは完璧な布陣だ。

問題はないだろう。

「……………！」

声には出していないが、ディーナは物凄い嬉しいというのが言わなくても分かるくらい体で表現している。

手をぱたぱたさせ、目を輝かせながらそわそわとしている。

「荷物はまた明日運び込めば良いし、部屋ならいくらでもあるし、問題はないだろ……………。さて、ではディーナ」

「！ ……はい……………！」

「みんなで、この城に住みませんか？」

ディーナは迷わず。

迷い無く。

戸惑わず。

返答を述べる。

「……………はい……………！」

今日、同居人が一人増える事になりました。

1 - 九 変態の利？

『ノーマル
普通』

場により、状況により変化するこの言葉は、とても美しいものだ
ろう。

平均的で平凡。

中間で中流。

通常で平常。

良いとはいえないが悪くはない。

悪くもないから良くはない。

誰もが普通を持つが、その普通をできない人間もいる。

欠陥人間は普通を追い求め。

凡人は高みを目指し。

天上人は普通を夢見る。

そんな矛盾したこの世界で。

どれだけ普通が素晴らしいか。

常人は分かっている。

いや、常人だからこそ分からない。

誰もその対象物の大切さなんて理解できない。

いや、一生理解できない訳でもない。

人間失ってこそ、その失ったものの大切さを知ることができる。

失えば価値が分かる。

失えば必要性が分かる。

失えば重要さが分かる。

常人は、自分の幸福さに気付いてないだけの。

常人だ。

俺、十乃字、ディーナは3人揃って只今昼休みの時間を使用し、『弐年壱組』と書いた札のある教室に足を運んだ。目的はもちろん、『貝塚灰樹』との接触である。

あわよくば、こちらから先に動いてそいつを捕獲するという手もある。

だが、できるだけ平和的解消を願うべく、俺たちはそいつに会いに来たのだが……。

「あれだろうな」

「あれだな」

「……あれ……」

弐年壱組の教室内。

後ろ側の入り口から覗いている俺、十乃字、ディーナの順に呟いて行ったが、恐らくあそこに座ってる奴が貝塚だろう。

断言できる。

断言できるほどの理由があるからだ。

このクラスの人数が。

一人しかない。

机の数は1つ。

座ってる人間も一人。

この教室には、その人間以外誰も居ず、人気などまったく感じさせない。

俺たちの視線の先には、俺よりやや高めだと思われる身長、灰色の髪色のウルフカット。

恰好は制服ではなく、真っ白……ではない、清潔感を感じさせない汚れた白衣。

スタイルは良く、間違いなくイケメンと呼べる範囲だろう。

そんな人間がただ一人、机に座って小説に読み耽^{ふけ}っていた。

雰囲気は深窓の令嬢男版、といったところだろうか。

「どういうことだ？ このクラスはほとんど登校拒否なのか？」

「そんな訳あるか。調べたところ、弐年壱組は奴だけの特別教室ら

しい。まさに、天才ゆえのいたせりつくせりつて所だ」

「……vip……」
なるほど。

確かに、IQ200以上の天才だ（変態らしいが）。

魔王候補生でなくとも、それ並みの職には必ず就くだろうし、何時の日か世間に名を残すとまで言われている奴だ。

当然の待遇と言えれば当然だな。

「……お邪魔します……」

「!?!」

「!?!」

ディーナは当たり前前のようにそのクラスへと入っていった。

まるでそこに入るのが当然のように。

自分の家のドアを開ける感覚で。

この子……たまに読めない……。

俺と十乃字も、ディーナに続く様な形で後を追ひ、貝塚の数歩手前までの地点で足を止める。

「? なんや君たち? ワシになんか用かいな?」

貝塚と思われるそいつは、俺達の気配に気付くと小説を閉じ、こちらに向き直った。

んっ、意外に真面目そうな人……。

「おーっ!!! 良く見ると中々のベツピンさんやなあお二人とも!
! ちょっとパンツ見せてくれへんかいなあ!?!」

前言撤回。

変態だ。

「一回……死ね!」

「……スケベ……!」

十乃字はいつも腰に提げている大剣（置いて来いよ）を相手の頭上目掛けて瞬時に振り上げ、そして力を込めて振りおろし。

ディーナは『氷姫締結』^{ソンドラバーン}を発動し、手元に青白い光の放つ魔方陣を創り上げれば、物凄い速度で氷柱を相手目掛けて伸ばした。

えっ！？ そんな行き成り戦闘！？

だが、十乃字の大剣は床を切り裂き。

ディーナの氷は壁を貫通させただけであった。

狙いの先は。

貝塚は。

俺たちの背後にいた。

！？ 早い！？ 何時いつの間に……！

俺は攻撃を行っていない。

故ゆえに注意が逸れてなかったため、いち早く背後の貝塚に気付けた。

十乃字とディーナは、頭の中では相手が後ろにいるのは分かっているみたいだが、体がまだ動いていない。

ダメだ……相手の攻撃に間に合わない……！

俺の魔拳ストレートはそんなに瞬発的に発動はできないし、このままでは背後を取られたまま殺される……！

「さあ、変態アブノーマルタイムの時間や……！」

ここで説明したいことがある。

この学園の女子の制服は、一般的な紺色のブレザー。

清楚と気品を感じさせ、正に学生が着るのに相応しいものだ。

ちなみに、この世界の時間は、俺の住んでいた世界と時系列は同じなため、この世界では4月の中旬。

すなわち、女子のスカートはまだ長い。

んっ？ 何故このような説明をするか？

それわね。

十乃字とディーナのその長いスカートがめくられているからだよ。

！？

「……！！」
「……！！」

十乃字は黒、ディーナは白だった。

って何を考えているんだ俺ええええ！！

俺は顔が熱くなるのを感じて、すぐさま十乃字達とは逆方向の宙に視線を変える。

「はははっ、眼福やったで!!!」

ちなみに捲めくった張本人は親指を立て、満足そうな顔で後ろにまだいた。

ちらりと視線を戻すと。

十乃字顔は真っ赤にしてスカートを押さえ、ディーナはメガネが曇るほど熱くなりあたふたしていた。

「……絶対に……殺してやる!!!」

「……………死ぬ……………!!!」

そこには怒れる般若が二人。

こええ……。

「はははっ、でもお二人さん、もう予鈴はなつてまんぞ？」

教室に付属されているスピーカーからは、確かに高く、学校独自のチャイムが鳴り響いていた。

「ここでは授業1つサボるだけで成績にかなり響きますからなあ、それに、ワシは次移動教室やから、通させてもらいますよっ」と

貝塚はそう言い残すと。

目にも止まらぬ逃げ足の速さで教室から出、すぐに姿が見えなくなってしまうた。

手も早く、頭の回転も速いと、足も速くなるのだろうか……。

「……放課後は」

「……戦争……………」

十乃字、ディーナは笑いながら……。

いや、目が笑っていない。

そんな不気味な笑みを浮かべながらゆっくりとして歩調で二人とも教室に戻っていった。

……………かえりてえー。

放課後來たくねえ!!!

でもいかなくちやならないんだよな……………。

俺も仕方なしに、とぼとぼと自分の教室へと戻っていった。

放課後。

再び俺たち3人はこの『弐年壱組』に来たわけだが……。

「……いねえな」

「いないな」

「……いない……」

俺、十乃字、ディーナは順に呟いてしまったが、先ほどの変態と貝塚灰樹の姿はその教室に居なかった。

「帰ったんじゃないか？」

「いや、恐らく部活に行っただけだろう」

「部活？ あいつ部活やってんのか？」

「うむ、生物部の部長を務めていたはずだ」

「……生物部……なら……二つ……隣の……校舎……」

「なら、そこに行くしかないな……」

俺たちは、その『生物部』に行くため、2つ隣の校舎に行くことになった。

この学院は、部活動にも力を入れている。

文化部6割、運動部4割の対比で存在し、その文化部の1つが生物部である。

他にも文学部、天文部、演劇部などが文化系の部活に属している。

運動部は……。

一応調べたが、こつちの世界には無いスポーツばかりで、説明が難しい。

どれも異様な雰囲気のもので、とても俺が参戦できるスポーツではなかった。

まあ、十乃字ならどれもエースを張れそうなのだが。

この様に、様々な部活動がある中、文化系でもっとも資金が多く

つぎ込まれ、力を入れているのが。

今たどり着いたこの『生物部』という訳だ。

部室の扉には『生物室。立ち入り禁止。ワシのファンの美少女は入室許可』と筆で書かれた紙が貼られていた。

「寝言は死んでから言え!!」

みんなの暴君、十乃字さんはなんと扉を蹴り壊しての入室。

本当に男らしいな、オイ。

あと十乃字、それだと死言になる。

ゾンビかよ。

「御三方は……確か昼休みに教室に来なさった達じゃないでつか？

もしかしてワシのファン」

貝塚は驚いた様子もなく、生物室の真ん中に置いてある薄汚れたソファに腰を掛けて、こつちを振り向いた。

手元には黒いファイルを持ち、閲覧していた時に俺たちが来たよ
うだ。

「死んでもそれはない」

「……………ない」

十乃字とディーナは口を揃えて断言した。

「恥ずかしがらんでええで。確かに、好意を抱く人につい冷たくしてしまうちゅうのはあることや……………はっ！これがツンデレか!」

「1000回死んでこい」

「……………つんでれ……………?」

ツンデレって単語……………この世界にはあるのか……………。

その前に、この3人だと話に埒らちがつきそうにないな……………。

「いや、単に今日はお話があつて来たんだよ」

俺は話に割り込むような形で入り、貝塚に簡単に事情を説明した
が。

貝塚は急に興味が削げた様に、近くのソファに座り込んだ。

「話? ふうん……………まあ聞くだけ着いたるわ。で、なんや?」

「簡単だ、お前が生徒会に命令された暗殺についてだ」

……。十乃字さん、もっと遠回りに聞くとかオブラートに包むとかあるじゃないですか……。

なんでこの人はスパツと単刀直入にいえるのだろうか。いちいち行動一つ一つが男らしい。

「……暗殺、ねえ。確かに命令されてるけど……あんさん等何もんや？　なんでそんな事知つとるん？」

軽く驚いた素振りを見せたが、すぐにテーブルに置いていた冷めたコーヒーを軽く飲み、俺たちを一瞥した。

……んっ？　貝塚は命令された以外何も知らないのだろうか？

実際、殺す対象である俺が目の前にも何の行動をも示さないし。

更には、同じ暗殺命令をだされているディーナのこと初めてあったような態度。

ディーナと貝塚は少しながらも顔を合わせているはずなのに……。命令以外何も覚えていない。

天才でも暗記が不得意なのだろうか？

「こつちの事はいい。ただ質問に答える。暗殺命令を取りやめる気は？」

「無いな」
即答。

こつちの『やめる気』の『や』の部分から言いはじめ、『気』を言い終わる前に返事を終わらした。

まさしく即答。
即、答えた。

暗殺をやめる気が。
無いのを。

「なんだ？　お前も生徒会テスタメントに殺されるのが怖いのか？　問題ない、それはこつちがなんとか」

「別に、そんなの怖くない。ワシはこの暗殺命令に利益を見つけ出

して、ワシに得があると思ったからやるんや。だから」

貝塚は。

その言葉を。

前から言おうと思っていたように。

タイミングを合わすように。

発した。

「御三方、死んでくれへんか？」

貝塚はおもむろに立ち上がり、手元を持っていたコーヒーの入っているカップをラップ飲みし、口元からコーヒーを零しながら、汚れた白衣を一層汚していた。

俺たちを。

睨み付けながら。

「……やはり知っていたか」

「ああ、知ってたで。というかあんさん等の事ならなんでも知ってる」

貝塚は天井を見、その口から。

言い出す。

「老年壱組十乃字小夜16歳身長170? B89・W58・H83
得意科目体育好きな食べ物甘味物最近趣味なのは学院の食堂のクラ
ンチを頼むとついてくる犬ストラップ集め学生でありながら魔王直
属の秘書などの作業をしている敏腕秘書成績は毎回トップ10に入
る優秀さ男子生徒からの人気も高いうえ先生からの受けも良く将来
を期待されている一人である老年七組ディーナ・アレクサンドル・
グリーナ16歳身長145? B68・W48・H67得意科目家庭
科好きな食べ物辛いもの最近の趣味は町での食べ歩き次期ロシア魔
王候補生であり現ロシア魔王の一人娘成績も十乃字とともにトップ
10に入る優秀さクラスからは王族として避けられ交友関係は少な
いメガネは現ロシア魔王からの贈り物である」

「!!--」

「!!--」

「!!!」

な、なんだこいつ……。

俺たちをまったく知らないような素振りを見せておきながら。

俺たちの事を。

様々な事を。

知っている。

んっ？

俺は？

「俺は何も言われてないぞ？」

「男に興味はない、ワシはこの学院の女子のみを知り尽くしているのやからな！」

そんな堂々と言われても……。

……!!!

右側から殺気が!!

すぐに俺は右方向に振り向くと、そこには下唇を噛みながら首まで真っ赤に染め、両手の拳をぶるぶる震わせてる二名がいた。

……わぁー……。

「……私は寛大な方だ、そんなものを調べられたところで怒りなどはしない」

「……………」

十乃字は相手にそう投げかけ、ディーナは続くようにコクコクと頷いた。

「しかし……しかしだ……………スリーサイズはどうやって調べたこの変態がああ!!」

十乃字はすぐさま地面が凹む勢いで蹴り、物凄いスタートダッシュを決め、相手の鳩尾みぞおち目掛けて斬りかかった。

だが、貝塚は軽くあしらう様に後退して避け、剣の風圧だけが貝塚の灰色の髪を揺らす。

「はははっ、まあそう怒りなさんな。どうせ御三方は死ぬんやからな」

軽く挑発するように、俺たち三人を睨み付ければ。
貝塚は。

もう知っている映画のラストを鑑賞するように。
つまらなさそうに。

俺たちに言葉を向ける。

「アップノーマルタイム変態の時間は終わりや、ここからは」

一度一区切りし、再度口を開けた。

「メタモルフォーゼタイム変態の時間」や」

1 - 拾 天才に金棒

『変態』

辞書で調べたらすぐにわかる事なのだが、この言葉には様々な意味が存在する。

主に使われる意味としては性的倒錯があって、性行動が普通とは変わっている状態の事を指すだろう。

しかし。

形や状態を変えること。

これもまた変態。

形を変え。

状態を変え。

そんな生き物もこの世には数多く存在する。

有名なものをあげればアゲハ蝶だろうか。

醜いイモムシが、美しい羽根を持つ蝶へと変わっていく。

正に変態。

美しく変化し、軽やかに変態する。

そこら辺の意味をはき違えず。

この語を受け止めてくれ。

耳を傾けて聞いて欲しい。

今回の相手は。

異常に。

変態するのだから。

「.....」
声が出ない。

出そうと思って、まるで言語自体を忘れてしまったように。

脳の信号が送るのを拒むように。

まったくと言っていいほど。

驚きゆえ。

驚愕のあまり。

声が出ない。

別段、生物室に驚いたからではない。

この生物室は最初はかなり暗く辺りも何も見えなかったが、目が慣れるとその部屋には大量の動植物の模型や剥製はくせい。

さらには大量の実験器具や難解な本が机に積まれていた。

だが、そんな事に驚いていのではない。

そんなものに驚く暇がない、と言った方が正しいだろうか。

俺の目の前にいる。

あの。

貝塚が。

体が粘土のように変形し。

両手が。

鎌に。

両足が。

四本足に。

頭部は。

蛇のように。

貝塚は。

貝塚灰樹は。

人外になっている。

「!!! なんだコレは……!!!」

十乃字が真つ先に言葉をもらしたが。

誰に聞いても分からないだろう。

こんな生き物。

誰も分からない。

「失礼な嬢ちゃんやな、さっきはあんだけワシを殺すとかゆつと

ったのに」

貝塚と思われるそいつは、カラカラと愉快そうに笑っている。いや、笑っていると言っているのいいのだろうか。

今の奴の顔は人間ではなく。

人外なのだから。

「さあ、もう知つとると思うが、礼儀であいさつしたる。ワシの名前は貝塚灰樹。弐年一組所属。あんさん等には恨みはないが」

惑わず。

迷わず。

率直に。

端的に。

貝塚は。

それを発した。

「死んでくれや」

貝塚はその四本足でこちらに駆け出し、その両手の巨大な鎌で俺の首を刈りに来た。

溜め無しの、ただ『傷つける』を目的とした浅い斬り。

「ベース基盤はかまきり蝟螂、切り裂き引き裂き斬り殺す」

鎌が俺の首に斬りかかれるギリギリに。

俺は斬られそうになっていいる事実をやっと認識し、反射的に右拳ストレートに魔拳を発動しながらその巨大な鎌を正面から殴った。

が、その鎌は。

蝟螂の鎌とは比にならない硬さ。

それが拳を通じて理解できる。

俺の右兼は鎌を止め、そのまま鎌を握って動きを止めたが、拳からは血が滲みだしていた。

側面から殴るには反応が遅すぎたため、鎌の刃の部分を握るかたちになってしまったからだ。

赤く濃い。

血が少しずつ滲みだす。

俺の拳が。

赤く染まっっていく。

「ほお、えらいごつつい力ですなあ。じゃあこつちも」

相手の左鎌を右手で止めていたが、次は俺の左方向から近距離で鎌が振り落ちてくる。

今度は少々の溜めがあつた、斬りかかり。

真面まおもにうけたら、確実に肉が裂かれるだろう。

しかし、今度は俺も瞬時に左手にも魔拳マクワンを発動して受け止め、刃の後ろを掴むことに成功。

両鎌の動きを完全に止める。

こちらは俺を含めて3人。

俺がこいつの動きを封じていれば勝機がある。

「あらあ、両手が動かんようになってもうたな。まあでもあんさん。ちよい質問なんやけど、『コモドドラゴン』って知ってか？」

「『コモドドラゴン』？」

「………ツンドラバーン 氷姫締結………!!」

俺と貝塚が鬨ぎ合っている中、右隣にいたディーナがその単語を聞いた瞬間、俺を青白い魔方陣から創り上げた先が丸くなっている氷柱で吹き飛ばした。

「ぐはっ!!」

鎌を止めていた俺はそれなりに踏ん張っていたわけで、やはり突然の横からには反応はできず、受け身がとれないまま床に激突。いてえ……。

「『コモドドラゴン』コモドオトカゲとも言われるが、口内へモトキシンという毒を持つトカゲの一種だ。血液の凝固に関係しているタンパク質であるフィブリンを分解し、血液の凝固を妨げてシヨック状態を引き起こす」

十乃字は懇切丁寧に説明してくれたが、良く分からなかった。

まあ一応強力な毒という事は理解できた。

つまり、あの顔は蛇ではなく、『コモドドラゴン』の頭……。

噛まれたらお終いだな。

ディーナもそれを理解したうえで俺を吹き飛ばしてくれたみたいだ。

危ない危ない……。

相手の両腕を封じても、自分の両腕まで封じてるから、あの状態だと噛まれるところだった……。

「さすがに3対1やったら、そちらはんに数の利がありませんなあ……

…まあ殺すから関係無いんやけども」

「寝言は死んでから言え！！」

だからそれは死言だってば。

しかしそんな突っ込みを入れる間もなく。

俺たち3人は一気に突っ込んだ。

もちろん漫才的意味合いの突っ込みではなく。

攻撃的な突っ込みだが。

ディーナは左腕に氷を纏わせ、そしてその手で巨大な氷剣を創り上げて貝塚を切り裂こうと。

俺は魔拳を右腕に発動させ、貝塚の右半身を殴り飛ばそうと。

十乃字は貝塚の後ろに回り込み、そのまま背後を大剣で斬り付けよう。

3人同時攻撃。

これならば一撃は確実に当たる。

そう思った。

思ったのだが。

貝塚に。

その考えは非常識だった。

「基準は馬、踏み付け蹴り付け蹴り殺す」

貝塚は重心を前へ移動させ、そのまま後ろ足で大地を蹴る様に。十乃字を蹴りつけた。

「！！！！」

馬。

元来臆病なこの生物は小さな音にも敏感で、後ろにいるものを不安で蹴り飛ばしてしまう。

馬に接するとき、後ろにいつてはいけないと言われるのはこのせいだ。

馬の脚の筋肉はとても発達し、その蹴る力は100キロ以上。人間なら5m以上吹き飛んでしまう。

その蹴りを。

十乃字は大剣で衝撃を流しつつ受けたが。

相当な威力だったのだろうか、耐えきれず床に倒れた。

いや、あのまま行けばあいつなら避けれたはず。

何故避けられないか。

そんなの分かりきっている。

ディーナと戦ったときの傷が癒えてないのだ。

「お前！ やっぱり背中^ゃの傷治ってないだろ！」

「五月蠅い！ 人の心配より自分の心配をしろ！」

まったくその通りだ。

俺とディーナも同時攻撃を仕掛けている。

しかし貝塚は。

右鎌で俺の右腕は止められ。

左鎌でディーナの氷剣はいともたやすく受け止られていた。

「どうしたあ？ あんさん等、3人がかりで一人も倒せへんって、

それは弱すぎるんちゃうの？」

「くっ……！」

違う。

俺達は全力で。

そして100%の力で戦っている。

弱いんじゃない。

こいつが。

強すぎる。

「一旦距離を取るぞ！」

「……………！」
俺とディーナは鎌を弾く様にして後ろに後退し、相手との距離を十分に取った。

あいつの攻撃手段はあの強力な蹴り、鎌、そして毒。
遠距離戦の方が良い。

「一体全体、あいつは何者なんだ……………！ 魔法なのか!？」

「……………体を……………あんな風に……………改造……………する……………魔法……………見た事……………ない」

俺は十乃字達みたいにくっこの人間ではないが、書物室で伊達に毎日本を読み更けているわけではない。

知識にはそれなりについてきたと自負しているし、大体の事なら分かる。

ディーナや十乃字はこの学院でもかなりの優秀さを誇っている。
だが3人とも。

貝塚の使っている魔法が。
分からない。

「おいおい、最初に魔法名言ってやったやろ」

貝塚は呆れるように首を振っているが、最初に？

こいつ、いつ魔法名を言ったんだ？

「ワシの使っている魔法は『メタモルフオーゼタイム変態の時間』。それ以上でも、それ以下でもない。ワシの得意魔法や」

「？ なんだ……………ソレ」

「……………知ら……………ない……………」

魔法名を聞いても、俺はまったく聞き覚えが無い。

「当たり前や。そんな魔法はこの世には存在させへん。この魔法は……………」

貝塚は。

得意げに。

自慢げに。

決め台詞を言うヒーローのように。

俺たちに教えた。

「ワシの創ったオリジナル魔法や」

「オリジナル……!?」

自分で創った魔法。

それなら貝塚以外は誰も知らないし、誰も理解できないだろう。

「……魔法……そう簡単……に……創れない……し……編み出せ……ない……」

「そりゃあ常人ならな。ワシは違う、全てが違う。あんさん等も知つとるやる?ワシは……天才や」

言っただけ言ったように貝塚はその巨大な大鎌で俺を叩きつけた。

貝塚の言葉に驚愕していた俺は反応が遅れ、そのまま地面に這い蹲る形になってしまった。

「ぐ……は……っ！」

鎌の重量は半端なく重い。

一体何キロあるんだ……!

俺の体内で音がなった。

骨が恐らく折れてしまったのだろうか。

「あーら、アバラ2本つてとこやな」

「!……宗谷……!!」

「いや、あんさんもそろそろ死ねや」

貝塚は飽きた玩具オモチャを投げ捨てるように、ディーナをその下半身……馬の脚で蹴り飛ばした。

「があ……っ！」

ディーナも咄嗟の強力な一撃を氷柱で防ごうとはしたが、完全に避けられず壁まで吹っ飛ばされてしまった。

コンクリートの壁に直撃したディーナは、立ち上がろうとしたが、衝撃が脳にきすぎたせいか気絶。

「! グリーナ！」

「お前は怪我人なんやる? そう大声だすもんやないで」
十乃字がディーナに少し視線を投げているところを。

貝塚は見逃さず。

瞬間的な。

接近。

「寝とけ」

鎌をぶつける様にして十乃字に振り落としてきたが、反射的に十乃字は大剣を盾にし、その攻撃を受け止めた。

だが、十乃字はディーナとの戦闘でまだ傷を負っている。

そんなあいつが。

全力で踏ん張れるはずもなく。

大剣ごと。

吹き飛んだ。

「ぐっ……」

十乃字までもが横腹に綺麗にヒットし、意識を少しずつ失ってゆくように。

壁にもたれかかりながら倒れていった。

「なんや弱いなあ……殺しがいちゅうのがないなあ。まあ良い、残るはあんさんや」

貝塚は。

その死んだような目で。

ゴミの様な腐り果てた濁った二つの眼球で。

俺を上から見下すように。

睨み付けた。

「せつかくやし、冥途の土産や。この魔法について説明したろ。ワシって優しいやろ？」

俺の髪を掴み、持ち上げる様になると、笑いながら。

家族と会話するように。

気軽に喋りかけてきた。

「『メタモルフォーゼタイム変態の時間』。こいつは体内に生物情報を取り込むと、自分自

身の体を思うがままに変化させることができる魔法や。動物の血なんかがそうやけど、そいつを体に接種し、あとは周りのマナを吸収

し、エネルギーとして体を変化させるといってや」

生物情報……恐らくDNAか……。

それを体内に取り込み、細胞の急速分裂……。

必要なエネルギーはマナで補う……。

確かに聞けば簡単そうだが、ディーナが言ったように魔法を創るのは並大抵なことでは不可能。

あくまで机上の空論。

マナの吸収率、使用率、操作法の発見。

取り込むまでの過程、実証。

何百人の研究者、最高の施設、時には犠牲、さらに長い月日をかけ。

そしてようやく1つ生まれる。

しかし貝塚は。

この天才は。

一人で。

創り上げた。

「さてはて、お喋りタイムは終了や。じゃあ最後の挨拶や。……

…じゃあな、回座宗谷」

おいおい。

俺の名前知ってるじゃねえか。

まあ知ってるうが知らなかるうが。

どうやら。

ゲームオーバーっぽい。

人形を壊すように。

解体するように。

取り外すように。

俺の上半身と下半身は。

泣き別れ。

貝塚の鎌によって。

引き裂かれた。

1・拾巻 『禁』を追う者は山を見ず

『誤認』

誤って認識する。

字面通りの説明になってしまったが、生憎、俺の語彙のボキャブ
ラリーではこんなところなので勘弁してほしい。

人という生物は、生命の危機になるとどうも誤った情報を取り込
んでしまうらしい。

脳の誤作動、情報の取り入れミス。

思い込み、と言っておこうか。

あまり生命の危機ピンチに陥るといふ現場に、普通の人には出会いにくい
が。

雪山で遭難。

部屋に監禁。

そんな状況が当て嵌まるだろう。

よくテレビなどのニュースやドキュメンタリーで見ないだろうか？
遭難していたら幻聴が聞こえてきたんです。

死ぬとおもったら幻覚が見えたんです。

みたいな。

幻聴や幻覚。

どうやら幻聴や幻覚。

それらを。

人は。

ある一線を越えると。

何かを。

誤認するらしい。

上半身と下半身が泣き別れした。

そう思った。

そう見えた。

そう感じた。

数秒の時間が経ち、俺の脳はやっと働きたそう。

俺は自分の体を見ても、普通に上半身と下半身は繋がっていた。

しかし、離れていた奴もいる。

貝塚灰樹。

馬の様な下半身と、蟻螂と蛇のような上半身が。

泣き別れをしていた。

「がっ!? があああああああ!?!? な……なんでワシが斬られとるんや!?!?」

その叫びは室内中に反響し、俺の鼓膜を揺さぶる。

貝塚の上半身はまるでゴム毬まりのように落ち、跳ねた。

下半身は切り口から血の噴水をあげて、そのまま倒れ込み停止。

「答える義理はない」

貝塚の後ろにいたのは。

血飛沫を浴び。

赤に染まった剣を持つ。

十乃字の姿。

「なっ!?!? あ、あんさんはもう動けんように……」

「勝手に決めつけるな。私を相手する時は」

貝塚の顔を踏み付け、そのまま唾を吐き捨てる様に。

十乃字は蔑みながら。

答えた。

「化物を相手取ると思え」

貝塚は口から血を流しながら。

十乃字に睨み付けるように。

やりきれない表情で見る。

「お、おい十乃字! 早くそいつを保健室……いや、病院に連れて

行かないと……！」

俺は正直起き上がるのも辛い、そんな場合ではない。

こんな状況を見ていて、呑気に倒れていられない。

このままだと貝塚が死んでしまうぞ！？

「……お前は本当に馬鹿だな」

十乃字は呆れるように自分の髪をくしゃくしゃにし、その後、俺を馬鹿にするように。

「今のさっきまで私達を殺そうとしていたこいつに情をかけるとは……優しさは度を過ぎると只の間抜けだぞ？」

「そんな事言ってる場合じゃねえだろう！早く貝塚を……！」

「慌てるな、こんな傷。普通ならすぐに死ぬ、奇跡的に命を？いいてもすぐに死亡する」

「……！」

「……なんて事だ……。」

貝塚は……死んでしまうのか……。
人が死のうとしているのに……。

「……なあ嬢ちゃん、あいつ泣いとるで？」

「天性の馬鹿なのだろう」

「なるほどな」

貝塚と十乃字は適当な会話をしながら俺の方を見ていた。

「……えっ？」

「お、オイ。なんで貝塚はまだ死んでないんだ……？」

「失礼なやつちゃなあ。ワシは死んでないわ、そろそろ死ぬけどな」

「言っただろう、普通なら死ぬが、今のコイツは普通じゃない。内臓器官から全てが無茶苦茶だ。更に言えば、人体系魔法を創っていたこいつが、何の対策も無い訳ではないだろう」

十乃字は貝塚の来ていた汚れた白衣を取り上げると、その白衣の内には大量の血液らしきものが入っている半透明なカプセルが装備されている。

「お、お嬢ちゃん……さすがにワシもそれを取り上げられると死ん

でしまうんやけど……」

「死ね」

と、十乃字の一喝。

怖いよ。

「つと、言うのは冗談だ。お前からは色々聞きださなければいけないからな……。まあ逃げないように工夫はさせて貰うがな」

「工夫？」

「取りあえず、ここにある研究レポートは全て取り上げさせてもらおうか」

「！？ こ、怖い事言うなあ」

「天才といえども、魔法の欠点などは記録していない訳が無いからな。それに、私達がこのレポートを公にする事もできる」

「……はいはい、降参や降参。取りあえず、その白衣の内の【B・31】って明記されとるカプセルを口にいれてんか」

「まあ良いが……。なんなのだコレは？」

「人の血……というか、人間状態のワシの血なんやけど。それを飲んで、吹き飛んでるワシの下半身をワシの上半身の近くにくっつけてくれたら数時間で接合されるわ」

十乃字は貝塚の下半身を上半身の近くに運び（よく運べるな）、口にカプセルを入れてやった。

貝塚はそのカプセルを齧る様にポリポリと食べると、そのままゆつくりと目蓋を閉じる。

その後十乃字は、生物部の室内にある研究レポートと思われる用紙、ファイル。

そして資料やまだ書き終わっていない記録書まで。

実験に関係ありそうなものを洗いざらい探しては全て箱に詰めて持ち運ぶ準備をした。

「じゃあな変態。くつついたら速攻で魔王城まで来るように」

十乃字はまだ床に倒れ込んで接合を待っている貝塚を指さしながら、命令。

目蓋まがたまを閉じたままの貝塚は短絡的に

「へいへい」

と、やや適当な返事。

まだ気絶しているディーナを俺が背負い、十乃字と俺は貝塚を一瞥してから、ここに入ってきた入り口を再びくぐって、一旦魔王城に帰宅することになった。

夜の8時。

俺から時計回りに、ディーナ、十乃字、貝塚と食堂の円卓を囲みながら椅子に座っている。

「では、話してもらおうか貝塚。他の暗殺者について。そして何故生徒会タメントが魔王代理人のこいつを殺そうとしているか」

「へいよ、敗者のワシとしてはまあ語らなあかんと思いますし？」

後、ワシの研究レポートも返してもらわへんと困りますしな」

貝塚は口を3の字にして、拗ねる様に喋り出した。

「ワシは生徒会タメントに暗殺命令を出されたのは、まああんさん等も知っているとありますが……。他の暗殺者は全員ワシは知つとるつちや知つとる」

貝塚は面白そうに。

既に見たことのある脚本を読み直すように続ける。

「生徒会タメントが暗殺命令を出したのは5人。次期ロシア魔王候補生、壹年七組ディーナ・アレクサンドル・グリーンナ。貳年壹組、ワシこと貝塚灰樹。次期アメリカ魔王候補生、叁年参組シルヴィア・アーレント。肆年八組、次期日本魔王候補生まかのしま曲ヶ島左折させつと曲ヶ島右折まかのしまの双子兄弟」

貝塚は流れる様に口に出していた。

「というか全員知ってたのか……。学年とクラスまで。」

しかし、最後の『次期魔王候補生』？

聞きなれない単語だな……。

「次期魔軍候補生つてのはなんなんだ？」

素朴な疑問を問いかけると、十乃字は呆れたように。

「それすらまだ調べていないのか。本当に馬鹿だな」

失礼な。

俺は別に頭が良い方じゃねえんだよ。

知らないだけだ。

無知は罪というが、この場合はソクラテスも許してくれるだろう。

「次期魔軍候補生。次期魔王候補生と違う箇所といえば、魔軍候補生の方が圧倒的に戦力が高い」

「？ 強いつてことか？」

「……戦闘が……秀でて……る……」

「まあ、戦闘タイプつてところやな。ちなみに、魔軍候補生の『魔軍』つてのは、この国が所有している外敵への対応を生業なりわいとする『戦闘』重視の仕事や。魔王候補生と違うところゆったら、魔王は総合力、魔軍は戦闘力つてとこやな」

なるほど、つまりこの国の軍隊というところか。

「そして、何故ワシがその男こと回座を殺さなあかんとゆつと……」

……

貝塚は溜める様に。

そしてじらすように。

一度声を区切り、間をあける。

「……知らん！！」

腕を組み、ただそこに堂々と構え。

その言葉を叫んだ。

「……………」

「……………」

「……………」

十乃字はおもむろに立ち上がり、その大剣を抜き出しながら。

「ふざけると首が飛ぶぞ？」

大剣を貝塚の首に当てた。

こええ……。

「いや、ほんま冗談抜きで知らんねん！ ワシはただ命令されただけで！ そしたら丁度都合が良かった！」

貝塚は片手を口に押え、目をキョドらせた。

「丁度？」

「都合が？」

「……良かった……？」

貝塚の額は滝のような汗が流れ、そのまま立ち上がって。

逃走。

だが無駄だろう。

ここには鬼神の生まれ変わりこと、十乃字小夜さんがいるのだから。

十乃字はその逃走を見逃すはずがなく、ダッシュし間もなく貝塚の正面に回り込み、大剣を首元に寸止めする。

その確実な大剣の軌道には迷いがなく、そして、そのせいもあって普通に怖い。

しっかりと力量を調節し、貝塚の喉すんで刃先を止めている。

「さあ、早く吐いてもらおうか？ 嘘を言った場合は首が飛ぶぞ？

お前のレポートもこちらが勝手に写してもらったし、それなりの処置も可能だ」

十乃字は連行するように貝塚を元の席へと座らせ、そのまま話をするように促した。

貝塚は渋る様に仕方なしに口を開いた。

「……ワシのオリジナル魔法……アレはまだ未完なんや……」

「未完？ あの魔法が？」

「せや。どうも肉体の変態時間が遅く、さらに使用後は不定期に激痛が走る。しかも3つまで特定の動物にしか変態できへんし、30時間はそれ以外の動物には変態できへん。せやからワシは実験し、研究を積み重ねた。そして、その研究も大詰めに入った……しかし

……」

貝塚は下を向き、低いトーンで。

両手で頭をかき、荒れた様子で話す。

「人間のサンプルがここで必要になったねん！ 人間の構造、臓器の位置、更には仕組み！どれも仮定で行ってきたけどとにかく必要や！」

パニックを起こしたように。

今まで上手くいったものを誰かに台無しにされたように貝塚は叫ぶ。

「しかしや！ワシに好機チャンスが巡ってきたねん！そうや、あんさん等の暗殺や！あんさんを殺した後、生徒会テストメントは死亡を確認できたあとは死体を譲ってくれる約束をワシにしてくれた！千載一遇のこの好機チャンスをワシは見逃せるはずもない！ワシはあんさん等の死体を手に入れて魔法を完成させるつもりやったんや！！」

螺子が外れた様に。

プログラムにバグが発生したように。

貝塚は次々と本心を明かし。

その本心は。

確実に狂ってた。

「お前はそのような事で私達を殺そうと？変態のうえに最低とは救いようが無いな。そこまで魔法が大切なら施設にでも置いてもらえ」

十乃字は冷たく相手を罵る口調で蔑み、そのまま椅子に腰を据える。

貝塚は十乃字のその言葉を聞いた瞬間。

冷めるように。

反論した。

「……別に魔法は大切やない……重要なのは……その売り金や……」
「売り金？」

魔法を……売るといふことか？

そんな事ができるのか？

「確かに、オリジナルでまだ誰も知られてなく、アレだけのレベルの魔法なら。他国の軍も喉から手が出るほど欲しいだろうな」

「……俺はこの魔法を完成させ、大金を手に入れる」

ただの金欲しさ。

それで完成させたいのだろうか。

だが貝塚はここまで必死になってまで、何故金が必要になるのだろうか……。

「お前は大金を手に入れたところでどうする気だ？ そこまで今必要になる理由であるのか？」

案の定、俺と同じ疑問を抱いていた十乃字は俺の思っていた問いかけを貝塚に投げかけた。

貝塚はそれに。

返答するように。

当然のように。

全員を一瞥して。

「高位禁魔法『黄泉戻し』セロリバースをやる」

とんでも無い事を吐いた。

1 - 拾貳 似た者不幸者

『^{タブー}禁魔法』

名前通り、使用を禁止されている魔法の事を指す。

禁止され、制限され、規制する。

^{タブー}禁魔法は国ごとに定めており、その国の定義や概念によって左右される。

使用したものは厳しい処置を受け、永遠に魔法使用权を^{はくたつ}剥奪されるほどに。

そして、日本で重く禁止されている魔法の一つ。

『^{ゼロリパース}黄泉戻し』

腐敗していない蘇らす対象者の肉体、莫大なマナ、複雑な術式通りの操作。

全ての条件をクリアし、そして最後に 運。

この魔法は簡単に言ってしまうえば、『死人を生き返らす』魔法。摂理を無視し、運命に抗う。

リスクの大きすぎる……^{タブー}禁魔法。

人を蘇らすというこの魔法は、条件が揃っていても成功確率は不明。

理論上では可能だが、成功例はゼロ。

失敗した場合は、膨大なマナが逆流し、使用者全員が死に陥る。

^{タブー}禁魔法は。

ハイリスク。

ハイリターン。

しかしこの魔法は。

^{タブー}禁魔法は。

人としても。

魔法使いとしても。

絶対タブーの一つである。

「大金があれば人が雇える。そうすりゃあ莫大なマナも集まる。あとはワシが独自の理論で修正した『黄泉戻し』ゼロリバースを行えば……死人が生き返る」

貝塚は愉快そうに。

しかしどこか不気味に。

その溢れ出さんばかりの笑みをこぼした。

「高位禁魔法『黄泉戻し』ゼロリバース……。そんなものを使用する企みがばれたら、お前はすぐにブタ箱入りだぞ？」

十乃字はその言葉を聞き、やや取り乱すようにして貝塚に言う。

取り乱すのも無理ない。

『黄泉戻し』ゼロリバース

高位禁魔法の中でも成功例を未だ出していない至難魔法。

手を出したものは全員が全員死亡。

禁断の中の禁断。

最悪の中の最悪。

「ばれへんようにワシも気を使つとる……例えば、色々周りから干渉されやすい『魔王候補生』を辞退したりな……それに、ワシはその魔法を使い、目的が済んだらブタ箱でもあの世でも行ってやるつもりや」

なるほど……貝塚が魔王候補生を辞退したのは自分の企みが周りに感づかれない様にするため。

そう考えれば合点がいく。

貝塚は嘲笑するように十乃字に笑いかけ、かつもその堂々とした姿勢を崩さない。

そして自分の状況を。

まるで他人事のように語る。

「……俺もその魔法は本で見たことがある……しかし、どう考えて

も失敗する確率の方が高い」

「言ったやろ？ ワシの独自の理論で修正してある。それでもダメならその時や」

「……………狂って……………」

デイナーは貝塚のいう事にやや恐怖を覚えている。

しかし、実際通りだ。

実際問題、狂ってるとしか思えない。

こいつは一か八かでの禁魔法をしようとしていない。

成功しても良し。

死んでも良し。

そんな考えで望んでいる。

「……………お前はそこまでして……………貝塚は一体誰を生き返らせたんだ？」

貝塚は俺の言葉を聞くなり、ただその単語を言う様に聞かれたから答える。

単純動作を連想させるように。

「オカンや」

その4文字を。

普通に伝える。

「は、母親？」

「せや。ワシのオカンはワシが12の頃に流行りの病で逝^{やまい}ってもた。

そのオカンを　蘇らす」

「はっ、くだらないな。母親が死んだのが悲しくて生き返らす？」

そんな子供みたいな世迷言を吐くやつがいるなんてな」

十乃字は貝塚に吐き捨てるように、そして腫物を見るようにして呆れている。

確かに、肉親が死ぬのは悲しい事だ。

しかし、摂理に反してまで生き返らすというのは。

本人も、他人も。

誰も喜ばない気がする。

どんな大義名分があるかと。

「……あんさん等、褒めて貰ったことってあるか？」

貝塚の行き成りの話題。

その場にいた全員は頭に疑問符を浮かべながら聞いていた。

「じゃあ例え話や。ある一人の男子学生がいて、その学生が歩いたら。あんさん等は褒めるか？」

「馬鹿な事をいうな。そんな事で褒めるはずないだろう。第一、褒める場所が見つからん」

「……まあそうやな。しかし、それが俺や」
？

貝塚は一体何の話をしているのだろうか？

いきなり話を振り、何を考えているのだろうか？

「ワシは世に言う天才。だから……何が出来ても当たり前なんや。努力して。頑張つて。そして素晴らしい功績を残そうが、テストで100点を取ろうが。友達は無か、担任さえも当たり前やからと褒めへん。努力を天才と言う一言で片つけられる。むしろ、嫉妬の視線の方が毎日のように突き刺さつとったわ。毎日毎日、そんな日々を送つては、ワシは机で本を読んでいた」

語られる貝塚の過去。

ありのままの現実。

天才の悩み……とでも言うのだろうか。

しかし、貝塚の話は聞いてるこちらも。

重く。

苦しい。

「しかしやな、ワシも褒められたことが無い訳やない。ある一人だけが毎日のように褒めてくれた……そう、オカンや。ワシの家は『普通』に幸せやった。学者のオトン、優しいオカン。毎日がとても幸せやった。みんなで食事して、たまに遊んで。オトンは毎日のように研究所にこもりつきりやったから、ワシの遊び相手は大抵オカンやった。そしてオカンと幼いころのワシの熱中していた遊びは折

り紙でな。よく折鶴が綺麗に折れたたびに、オカンに褒めてもらうたわあ」

思い出話をしている貝塚の表情は、優しい顔。

笑みを浮かべながら、幸せいっぱい表情だ。

「……やけど。オカンはある日突然倒れてもってな。毎日ベットで寝こんどった……。ワシはそんなオカンを心配したけど、オカンは毎日のように『すぐ直るから、もうちょっと待っててな』『またいつしよに折り紙したるからな』とワシに語り掛けてくれた。ワシがベッドのあるオカンの部屋に行くと、必ず口癖のように言うねん。ワシはその言葉を普通に鵜呑みにして、遊ぶのを我慢しとった。で、ワシは思いついた訳や。『千羽鶴を折れば、早く治るやん！』ってな。その頃のワシには神がかり的な案でな。意味も無く、ただの行動でしか無いその思いつきに、ワシは絶対に治ると信じきとった。毎日折ったわ。綺麗に、丁寧にもちろんその頃のワシは子供やからな。その上、手先も不器用。ほとんど失敗作ばかり出来上がる。やけれど、ワシは早く治って貰って、千回褒めてほしくて。綺麗なのだけを作ろうと。毎日毎日折った。毎日毎日毎日。失敗作は捨て、成功作は集め。そして、要約千羽降り終わった。やけれども……折り終わった時には……オカンは死んどった」

貝塚はその目尻から涙を。

隠すように下を向き、暗い声で続ける。

「天才と言われとる俺が馬鹿みたいやる？ 気付いた時にはな……死んどったねん……ずっと治って欲しくて鶴折って……オカンといつしよにいる時間まで削って……ずっと部屋の中で折っという……るくに親孝行もできず……毎日面倒もかけてもろうて……俺から何にもしてやれんかった……ワシわな……ワシわな……！！」

叫ぶように。

そして、怒鳴る様に。

俺たちに言いつけた。

視線を俺たちに戻し、殺すような目つきで。

鋭く、言う。

「親孝行がしたかったねん！！ やけどできんかった！！ なら責めて……責めて伝えたい……『ありがとう』って……！そして……一回で良いからもう一度……褒めて貰いたいねん！！ その計画をあんさん等は見事に邪魔して……なんや！ 親孝行は罪なんか！？ ありがとうの一言も伝えさせてくれへんのか！？ ワシわ………ワシわ………！！」

涙のせいか、貝塚は呼吸は続かず。

一旦呼吸を整え、そして

「褒められても貰えへんのか！！」

言葉をぶつける様に。

喉が潰れる気すらする声で。

貝塚は叫ぶ。

貝塚のその言葉一つ一つに。

確かに強い思いが籠っていた。

ただ泣き叫ぶその訴えに。

俺は。

何も共感出来なかった。

「お前、何言ってるんだ？」

ただその一言。

俺はコイツのいつてる事に、共感がまったくできない。

感情移入も、その思いも。

俺には何も。

伝わらなかった。

分かるのは。

その言葉に貝塚の思いが籠ってるのと。

声が五月蠅い。

それだけだ。

「まったく理解できないな。そこまでして生き返らす必要があるのか？」

俺の頭は疑問だらけ。

必要性が見つからない。

重要性が見当たらない。

こいつの言ってることが分からない。

何言ってるんのコイツ？

何したいのコイツ？

何がやりたいのコイツ？

何が目的なのコイツ？

すると貝塚は、俺を今まで見た中で一番鋭い眼光を向け、行き成り俺の胸ぐらを掴みだした。

「ああせやな！ あんさん等みたいに普通にのうのうと暮してきたやつにはわからへんわっ！ 普通に生まれた幸せなあんさん等にはなっ！！」

怒る様に。

泣き叫ぶように。

貝塚は。

訴える。

「普通じゃねえよ俺は。つーか褒められたこともねえよ俺は。」

貝塚を睨み付ける。

この感情は何なんだろうか。

殺意に似たこの感情……。

そうか……これはイラつきだ。

「俺は捨て子だ。一人で生きてきて、一人で育ってきた。だから親の顔も何も知らねえ。生まれたところから親からも人からも好意も向けられたことない。第一、関心すらも俺には向けられない。愛情ってなんだよ、おいしいの？」

イラつきながら。

八つ当たりのように。

昔の自分を思い出して。

それを貝塚にぶつけているだけかもしれない。

しかし。

ぶつけられずには。

いられない。

「褒められたいから生き返らす？ 感謝の言葉を伝えたいから生き返らす？ お前がそんな事望んで、お前の母親は喜ぶのか？ 嬉しいと思ってくれると思ってんのかよ!？」

「……………」

貝塚はひるむ様に。

そして。

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ。

後ずさりする。

「お前の母親はお前を悲しませたくない、心配させたくないから『すぐ直る』って言ってあげたんだろ!？ お前を大切に思ってる証拠だろ!？ 褒められたい？ 天才だから当たり前？ ならその才能の生かし方を考えろよ! 何蘇らそうとしてんだよ、暇なのか!？」

怒鳴る。

叱る。

俺は口が止まらない。

理性は壊れたのかもしれない。

「お前はテストで褒められたいのか!？ 違うだろ! お前は誰かに認めて貰いたいんだよ! お前のその才能は人を助けることも守ることもできる! お前は……………貝塚は万人から感謝される事ができるんだよ!!!」

しかし俺には何も無い。

親も。

才能も。

金も。

友も。

何も。

無かった。

だから俺は。

天才で。

才能を持つこいつが。

羨ましかったのかもしれない。

「お前はできるんだよ！ けどなあ！ 俺はできねえんだよ！

普通に生まれたから分らない？ 天才だから当たり前？ テメエ

は男版悲劇のヒロインかつ！？ 笑えねえよ！ 何全ての不幸を吸

つてきたような言いようしてんだよ！ 俺は金が無い時、喉が乾い

たらは溝みちの水を飲みこんで、腹が減ったら砂利じりを齧かってたよ！ オ

メエより不幸で、恵まれなく、悲しんでる奴なんか五万といたよ

！！」

できるとできないでは。

全く違うのだ。

例えるなら、俺は目が見えなくて。

コイツは目で見ていない。

見えないと見ないの違い。

俺は一生かかっても暗闇で過ごすだけだが。

コイツは。

貝塚見ることが出来る。

世界を。

美しいものを。

見ることが出来るんだ。

「お前だけが苦しいんじゃないよ！ だけどみんなそんな壁ぶつ壊

してんだよ！ 前に進んでんだよ！ だからお前も……道を間違え

ないで……道を正して」

俺はそのまま続けて言う。

「 幸せになって良いんだよ！」

コイツは幸せになれる。

コイツは恵まれる。

コイツは受け入れられてくれる。

道を間違えただけ。

すぐに引き返して、また道を進める。

「……………ワシは……………ワシは……………」

貝塚は言う。

その本心を。

力が抜けた様に膝から床に向かって落ち

跪きながら。

全員を見るように。

泣きながら。

両目に大量の涙を溜めながら。

鼻水まで垂らしながら。

子供のように。

俺と同じように。

「幸せになりたいんや……………」

訴えた。

俺は。

初めて貝塚に共感できた。

1 - 拾参 暗殺来ようが治療休み

「遊ゲームび」

労働や学業などの義務的行動とは対極の位置にあり、人の心に余裕を作り出す。

ストレス解消、リフレッシュ。

人はたまには楽しまないと、人生としておかしくなる。

二宮金次郎さんだって働いてはっかじゃないだろう。

たまに遊ばなければやってられない。

娯楽の無い人生はただの時間だ。

囲碁、将棋、テレビゲーム、プラモデル、ジョギング。

個人によって様々な楽しみ方がある。

切羽詰っても良い事は無い。

働きすぎても体に悪い。

楽しんで、楽しんで、笑って過ごす。

そんな日は絶対に必要。

呼吸をするように。

食べるように。

睡眠を取るように。

人生を楽しむためには。

これは絶対条件だ。

人は生きて。

楽しんで。

笑わなければ。

「……………空が青いな……………」

ある魔王城に存在する一室の部屋。

ベッドに横たわりながら窓から見える風景を除いてる奴こそが、
こんにちは。

回座宗谷です。

何故、俺がこんな昼間にベッドに横になっていているかというと、前回の貝塚戦でアバラを2本ほど折れてしまい……。

ただ今絶賛治療中という訳で。

ちなみに今日は日曜日。

この世界では日曜日はこっちと同じで祝日であった。

故に今日は学院も休み。

そして俺の隣では。

「どうしたものが……」

「……小夜……早く……」

「分かってる！ 迷っても仕方ない……！ これはどうだ！」

「ほい、ロン。リーチ一発ハイテイタンヤオ三色ドラフ」

麻雀をしている3人組（俺も）がいた。

……。

「……」

「おいどうした。傷むのか？」

「安心せい。ワシの治癒魔法は専門ほどではないが、それ位なら」

日横になれば治る」

「……いや……この治癒魔法……レベル……かなり高……い……」

「さすがは天才という事だな。魔法の習得の速さや上達の速さも並みの比ではない」

「いや、そうじゃねえよ」

愉快に麻雀をしながら仲良く話すな。

「俺が疑問に思っているのはなんで麻雀やる経緯になったのか、だよ」「簡単な事だ。新しい住居人2号の細やかな歓迎祝いと、お前の回復祈願と、暇つぶしのために麻雀をやっているんだ」

「そんな組み合わせは初めてだよ」

なんだその組み合わせ。

悪意があると思えない。

ちなみに、住居人2号というのは貝塚のことだ。

あの後、貝塚は暗殺を辞退し、禁高位魔法『黄泉戻し』セロリバースを諦めた。そしてその後は大変。

なんと十乃字が貝塚に『ここで働いてもらう』と言い出したのだ。俺も貝塚もディーナも頭に疑問符が飛び出た。

まあ若干の驚きも否めないまま。

十乃字の言い分はこう。

『お前も知ってるように、現在魔王の代理人としてこの馬鹿（回座）について貰ってるが。こいつは全然と言ってほど政治などに無知だ。そこでお前だ。お前は変態だが、ド変態だが、糞変態だが、一応天才だ。馬鹿（回座）を色々とサポートなどもして貰いたいし、更にはこれから様々な仕事が発生する。だからお前にここで住み、色々働いて貰いたい。給料も出るぞ？』

その時の貝塚は鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をし、若干戸惑っていたが、十乃字の次の一言

『お前の力が必要だ』

で、快く引き受けてくれた。

恐らく貝塚が、初めて誰かに必要とされ。

久しぶりの賞賛だったのだろう。

晴れて貝塚は住人2号となったのだ。

そして……。

「よし、リーチだ！」

「それロンや」

麻雀にいたってる。

というか十乃字が壊滅的に弱い。

こいつはとにかくギャンブルに向いていないタイプだ。

もう十万の負債を抱え込んでるよ……。

「あああ！！何故勝てないんだ！」

……………平和だな。

十乃字が隣で何やら叫んでいるが、俺には関係ない。
ちなみに、現在点数順に並べると貝塚、ディーナ、俺、十乃字と
いう順番だ。

「というか貝塚は異様に強い。」

雀鬼かよ。

恐らくカイジにも勝てるだろう。

「と、いうかこんな呑気に麻雀なんかしてて……暗殺者が襲ってく
るか分からないんだぞ？」

「あゝそれは心配ないわ」

貝塚が麻雀の牌を見ながらそう心配げの無い顔でつぶやく。

「ん？ なんでだ？」

「残りの命令されている……前説明した3人、次期アメリカ魔王候
補生、老年参組シルヴィア・アーレント。弐年八組、次期日本魔王
候補生曲ヶ島左折まかのしま させつと曲ヶ島右折まかのしま うせつの双子兄弟は調べたところ今日、生
徒会テストメントに今日召集をかけられてるんや」

「生徒会に？ またなんで？」

「……私達……が……暗殺……辞退……相手も……おかしく……思
ってる……」

「グリーナのゆう通りや。ワシらが急に暗殺を辞退した。相手側さ
んも何か考えをおこしてるんやる」

なるほど。

確かに相手側として考えればおかしな話だ。

「そして、ワシが予想するに次に襲ってくるのは……」

貝塚は人差し指で牌をくるくる回しながら雀卓に叩きつけ、パチ
ンと軽快な音を鳴らす。

「曲ヶ島左折まかのしま させつ、通称『殺人蜂』。そして双子の弟、曲ヶ島右折まかのしま うせつ、通
称『殺人蟹』。どちらも魔王候補生とは言われているが実力は相当
なものや。正直、魔王と大差がないで」

「……！ そのまでの奴らが次は俺を……。だけど、何でそいつら
だと分かるんだ？」

「簡単な話や。もう一人の方、シルヴィア・アーレントが現在戦闘が出来ない状況だと分かる」

「……どういう……こと……？」

「6日前、アイツは学院の職員室に無断侵入したことにより、教師の目がきつくなってる。しかし、この『魔王代理人暗殺』は表では知られていない、生徒会テストメントによって極秘裏に進めているわけや。例えば次期アメリカ魔王候補生でも、もし学園内生徒と戦闘している所を見られたら……言わんでも分かるな？」

「……悪ければ退学つてところか？」

「正解。確率から見ても次動くのは曲ヶ島兄弟まがのしまつてとこや」

「しかし、それはそれとして、そいつはなんでまた職員室に無断侵入を……？」

「さあな。やけれども、職員室には全学園生徒の個人情報からテスト情報まで様々なもんが揃つとる。理由なんか色々あるやろ」
なるほど。

そうなるとやはり次の相手は曲ヶ島兄弟まがのしま。

一体どういう戦いになるのだろうか……。

相手は魔軍候補生。

舐めてかかると痛い目を見るだろう。

「まあ蜂か蟹か知らんが、来たら来たで」

十乃字は腕を組みながら、その目を見開き。

「潰すだけだ」

と、かも確定事項を口にしてるように堂々としている。

「負けっぱなしのあんさんが言ってもどうも恰好つかへんけどな」

貝塚は茶化すように言うと、十乃字は反論する様に

「ち、違う！ どうも運が悪いだけだ！ お前ら積み込んでるだろ

！」

と、逆切れし始めた。

本当に負けず嫌いだな、コイツ。

「……小夜……往生際……悪い……」

「ぬっ……!!」

「せやでせやで、本来ならワシは脱衣麻雀がしたかったんやけど、ワシ以外全員がマツパになると思って遠慮してやってるんやで？ワシの親切に感謝しいや？」

貝塚、それは優しさなのか？

そんなどうでも良い話をしながら、一旦麻雀は終了。

「では、次はポーカーでもやるか？」

「おい十乃字。なんでさつきからギャンブル色が強い遊びばっかやるんだよ。というかそっち方面はお前絶対向いてないからやめとけ」
「黙れ、次は勝つ」

失敗するギャンブラーの典型的タイプだな。

「よっしゃ、ならワシの創った魔法でもお披露目したろ」

「……まだ……あつた……の……？」

「おうよ」

驚きだ。

前回にも述べた様に、魔法を創るのはとても難しい。

一つできただけでそれはもう偉業と言っていていいほど。

まだあるとは、本当に恐ろしい男だ。

「まあほとんど『メタモルフォーゼタイム変態の時間』を創るときにたまたまできたものな
んやが。妙にどうでも良い奴ができたからな、それを見せたる」

貝塚は右腕の手のひらを十乃字向け、小さな光がゆっくりと十乃字に当たった。

「……何か変わったか？」

十乃字は疑問の表情を浮かべながらこちらを見たが。

とても物凄い変化があった。

文面で分からないが。

十乃字の声が。

30代後半くらいの下町のおっちゃんのような声になっていた。
町工場で働いてそうなそんな声。

「!?!」

十乃字も自分の声の異変に気づいたように慌て、その後は予想通り。

貝塚の胸ぐらを掴んで鬼のような形相で

「どういうことだコレは!？」

と一喝。

おお、おっちゃんだ。

「いやいや、対象者の声の高さを変化させる事ができる魔法なんや」

貝塚は十乃字のおっちゃん声を笑い名から説明。

確かに……コレは笑える……!

しかし本当にどうでも良いな。

「ワシはこの魔法を『ボイスセレクター声域調整』と名付けようと思う」

名前だけは一人前だな。

「早く戻せゴラァ!!」

おお、十乃字が酔っぱらったおっちゃんの様だ。

片手に酒瓶を持って頭にネクタイ巻いてそう。

「あーはいはい」

貝塚もこれ以上はヤバいと悟ったのか、もう一度さっきの魔法を

使う。

「あーあー。よし、戻ったな」

自分の声を確かめるように言うと、十乃字は安堵の表情を浮かべ

る。

「では次やけど」

「もうするな」

止めるように十乃字は貝塚を殴る。

そりゃあ本当にろくなのが無さそうだからな……。

「いてて、暴力はいかんでー……」

殴られた頬を擦る様にする貝塚は、やや楽しそうだった。

……まあ、こうやってみんなでワイワイするっても悪くは無いか

な……。

少しだけそう思えた俺は、ちよっぴり楽しかった。

「こうなのが『家族』というものなのだろうか？

「よし、麻雀再開するぞ」

「まだやるのか十乃字。」

「……小夜……弱い……」

「確かに、あんた弱すぎますからなあ」

「右に同じ」

俺達3人は口を揃えて言う。

また初めからやっても結果は同じになると思う。

「いつそ神経衰弱するのはどうだ？」

俺は提案するように言かける。

神経衰弱はかなりメジャーなトランプゲームの一つ。

地方でルールは変わるが、俺の知ってるものはこうだ。

全てのカードを裏返し、それを順番を決めてめくっていく。

カードの数字が揃っていれば自分のカードとして取る事ができる。

揃っていればもう一度めくる。

揃っていないければ次の人の番。

そして、一番多くカードを取った人が勝ち、というものだ。

恐らくこれが最も標準だと思う。

「まあ良いだろう、麻雀よりは簡単だがな」

「……神経衰弱……得意……」

「いいで。ワシもグリーンナと同様に負ける気まったくせえへんけどな」

それぞれ自信満々に言う。

しかし、俺も苦手という訳でもない。

というか苦手が得意か分からない。

ルールは知っているのだが、俺は友達と遊ぶことなどなかった。

故に、俺は正直ワクワクしている。

みんなで遊んでいることに、俺はとても楽しんでいる。

まあ、その友達とやる最初の遊びが麻雀だったのはなんだかな…

…。
「じゃあ配るで〜」

貝塚はおもむろに後ろにあった（なんですぐにあるんだよ）ランプを取り出して、それを無造作に置いていく。

そしてゲームスタート。

そしてゲーム終了。

……うん、皆さんが疑問を抱くのも仕方がない。

何故、始まってばかりなのに終わってしまったかというと。

原因は一つ。

貝塚が最初だからである。

裏返し、当て、裏返し、当て、裏返し、当て……と、この男は全て当ててしまったのだ。

「はははっ、悪いな皆さん」

貝塚は愉快そうに取った札を見せつける。

「……おか……しい……そんな……偶然……ない……」

ジト目で貝塚を見るディーナ。

確かにディーナの言うとおりだ。

神経衰弱は暗記が鍵となるため、貝塚が優勢になるとは予想してたものの、全て当てるのはおかしかった。

何か仕組んでなければ、普通に考えて無理がある。

「いやはや、やっぱりばれる？」

貝塚は苦笑いして頬を掻く。

やはりイカサマでもしていたか。

「実は前にこのランプでババ抜きしててな？ 終わった後に札を集め取ったらその順番覚えてたみたいで……シャッフルせずに配ってもうたから全部かっとなん」

……それはイカサマなのだろうか？

やや判断に迷う俺がいる。

「ええい、どうせ普通にやってもこの変態が勝つんだ！ やっぱり麻雀に……！」

十乃字はまだ諦めがついていない様子で立ち上がる。

「別にええけど」

「……小夜が……最下位……なのが……」

「落ちだな」

貝塚、ディーナ、俺は当たり前のように言い並べる。

「黙れお前等！ 私はまだ本気を出していないだけだ！」

子供かよ。

そんな御託を並べては、十乃字は雀卓を取出し、牌を混ぜ始める。

「はいはい、まあ相手になつたるわ」

「……灰樹には……勝つ……」

おもむろに全員台に着くと、麻雀の再開。

……まあ、こんな一日があつても悪く無いかもしれない。

みんなで遊んで、みんなで楽しむ。

長い人生、楽しまなければ損だ。

「ほら、さつさと集中しろ」

そう言つて十乃字は牌を捨てる。

「あ、それロン」

貝塚は強運まで備えてた。

1 - 拾四 寝耳に蜂と蟹

『日常』

持たざる者は憧れ。

持つ者は退屈の対象。

まるでメビウスの輪のように人により、環境により矛盾するこの言葉に。

人はどれだけ救われ。

人はどれだけ落とされるのだろうか。

少なくとも、俺はこの『日常』を手に入れられるのだろうか。

疑問形で聞いて。

否定形で返されるだろう。

過去形に日常という単語を持たなく。

現在形で生まれる予感はない。

そんな日常を追い求める俺に、コレを手に入れることは。

至難の技だろう。

というが無理かもしれないが。

無理なのかもしれないが。

追い求めるくらい好きにさせて欲しい。

人が何しようと思手だろう。

代理人を務めている間は。

否が応でも手に入れるのは無理そうだが。

いつかコンビニで手軽に買うレベルで。

椅子から立ち上がる感覚で。

手に入れられれば。

一体どれだけ……幸福か。

魔王城で一番早く起きるのは俺だ。

朝の5:10。

まだ若干外は暗いが、もう体内時計で俺は目覚まし時計無しで起きれる。

俺は身に着けている寝間着を脱ぎ、そのまま適当な私服をタンスから選んで着る。

服は『公費』と言うことで、十乃字がまとめて買ってくれた。

ちなみに、センスがよく分らない。

Tシャツに堂々と『おにぎり』と書かれたシャツ。

あいつは何を基準にコレを買ったのだろうか。

そう思いながらもかけてある制服を手に取り、俺は扉に向かう。

自室を出、長い道の間を経て厨房に向かい、そのまま椅子にかけてあるエプロン（割烹着と言うのだろうか？）を着る。

俺はいつものように調理器具と素材を用意して、料理を開始する。自分のも合わせて四人前。

基本的に朝食は十乃字だけはホットケーキ、それ以外は全員の希望によって変化する。

ちなみに、今日のメニューはリーズナブルに目玉焼きとベーコンのバター焼き、そしてサラダとトースト。

朝はたくさん食べた方が本来良いのだが、朝に食欲バリバリの人間なんてそうそういないだろう。

卵を割り、フライパンを温めてから焼き始める。

テキパキと作業を進め、料理は着々と完成していく。

朝食が4人分出来るころには、時刻は6:00を少し過ぎた辺り。

この時間帯になると十乃字が食堂にやってくる。

もちろんホットケーキはもう焼きあがっている。

四人分の朝食をトレーに乗せ、俺は食堂に向かって歩きだし、予想通りに食堂の椅子に腰かけながら新聞を読んでいる十乃字の姿が目に入る。

「相変わらず早いなお前は」

目の前にホットケーキを差し出すと、十乃字は新聞をたたみ、フオークとナイフを持つ。

「お前が言っていると嫌味にしか聞こえないがな」

ホットケーキをゆっくりと口にする十乃字。

最近はいつも早食いでなく、味わって食うことにしているみたいだ。

前の様な下品で見られない食べ方も、やっと女性らしくなってきた。

食堂の掛け時計を見ると、時刻は6:30を回っている。

ここからまた忙しい。

食堂にふらふらと入ってきたのは貝塚とディーナ。

この二人はとにかく朝が弱いらしく、ディーナは一度寝ぼけて下着姿で来たこともある。

その後は俺は鼻血の湖に沈んでいった。

あの時は大変だったな……。

貝塚達は席に座り始めると、そのまま机を枕代わりにし……寝始めた。

始まったか……。

「お〜い、二人とも〜。起きろ〜朝だぞ〜」

二人を揺すりながら起こそうとするが、コイツ等は中々起きない。

「……あと……五分……」

「そう言う奴は絶対起きないんだよ」

「あと胡粉こふんだけや……」

「お前は日本画でも書くつもりか」

「たちの悪い二人組だ……」。

「仕方ない、最終手段に移るか。」

基本的に、何度呼びかけても起きない場合は手荒な手段に移ることにしている。

これはディーナ、貝塚、十乃字の全員が了承していることなので、

俺は何の躊躇ためらいもなくこの手段を実行する。

一度厨房の戻り、冷水を汲んだバケツを二つ用意する。

コレを再び食堂へ持っていき、貝塚とディーナの近くにセット。

そして、先に貝塚を羽交い締めつむぎの形で運び、冷水へと顔を……。

3、2、1、はい。

ドボン。

「冷めた!？」

貝塚は勢いよく目が覚めた。

この時期、まだ寒いものがあり、冷水などは体に応える。

「うゝさむさむ……またコレかいなゝ」

「嫌ならさつさと目覚めろ」

貝塚は歯をガチガチを鳴らしながら、小刻みに震えていた。

さて、手強いのはここからだ。

今度はディーナを運び、冷水の中に。

ドボン。

「……Z Z……Z Z……」

起きない。

冷水のせいで呼吸ができないにも関わらず、起きる気配など微塵も無い。

一度冷水の中に入れたままにしていたが、呼吸停止状態に陥るほど寝ていた強者だ。

「相も変わらず、グリーンナは中々起きへんなあ」

貝塚はタオルで濡れた髪を拭きながらディーナの様子を見る。

「夜更かしでもしてるのか……?」

「いや、それはない。グリーンナの部屋の明かりは基本的には9時ま

では消え取るからなあ」

「子供かよ」

早寝過ぎるよ。

なのになんでここまで寝るのだろうか……。

成長期というやつか?

「仕方無い、今日はこのまま寝かせておいておこつ」
「コイツの飯はどうするんや？ 朝抜くとけっこ辛いで？」
「一応パンだけ包んで持たせておく。朝のHRホームルームまでには起きると思
うし、それまでに食べて貰おう」
そう言いながらグリーナを一旦食堂にあるソファに寝かせつけ、
俺達も朝食を取ることにした。

「……………！ ……朝……………！」
「いや、もうすぐHRホームルームだよ……………」
現在、老年七組教室内。

結局中々起きないグリーナを教室まで背負って登校する事になり、
HRホームルーム5分前。
ディーナは目をパチクリさせ、やや口元からよだれを垂らしなが
ら起床。

今まで良く遅刻できずに登校できたなと感心したくなる。
「……………うっ……………また……………寝てた……………」
ガーン、という擬音語がぴったしくらい落ち込み。
「一応カバンに食パン入れてあるから、それHRホームルームが始まる前に軽く
食べとけ」

俺はディーナのカバンを指さすと、ディーナは落ち込んだままカ
バンからパンを取出し、はむはむと食べ始める。

今日の一時間目は体育。
こつちの世界と基本的にやる事は変わらないが、スポーツなどは
一切行わない。

身体を鍛える事のみを重視し、一応これも魔核スキルを鍛えるための訓
練ユラムの一つらしい。

しかし、今日は一段と眠そうなディーナがしっかり授業に取り組
めるか、若干心配な所があった。

そんな心配事を浮かべている時、教室の木製の扉がガラガラと開いた。

「はい、注目（呼）。HR始めるよー（呼）」

相も変わらず、その独特かつ不器用な声を教室内に響かせつつ、表裏先生は片手に出席簿を持ち、教卓に立つ。

「えー、一時間目の体育ですが、急遽^{きんじゆ}式年生の体育教師の都合で合同になりました（教）。なので、今日の体育は体育館で行うので、間違わず行ってください（注）」

合同？

式年生といっしょか。

それなら人数が多いから、ディーナが授業に集中出来なくても教師に怒られる可能性は低くなる。

心の中でガッツポーズをしながら、表裏先生はそのまま出席を取り、朝のHRは終わった。

「ディーナ、ちゃんと先生の話聞けたか？」

ディーナの席は俺の右斜め前のため、すぐに声をかけられる。

「……ほにえ……？」

当の本人はまだ寝ぼけていた。

「次は体育館らしいぞ。早く目覚めろ」

「……起きてる……Yo……」

「何時^{いつ}からお前はラッパーになった」

そんなどうでも良い漫才をしながら、俺はディーナの肩を激しく揺らし、やっとの事で立たせることができた。

「はい、歩いた歩いた」

「……ふみゃ……」

若干まだ舟をこぎ、おぼつかない歩きだが、できるだけ早く体育館へと誘導させる。

この学院の体育館は、やはり予想通りというか、予想斜め上の体育館だ。

というか本当に体育館というのだろうか？

天候によって閉会する屋根、広すぎる面積、そして何故かやはりあつた観客席、広さ故の10箇所も設置されている出入口口。

これは体育館というより東京ドームだ。
施設に力入れすぎだろ。

そして体育館の入り口から中へと入ると、かなりの人数の生徒が待機していたのが目に入る。

「んっ？ おお、回座達もおつたんか」

そこには双眼鏡を持っている貝塚の姿があつた……双眼鏡？

「なんで双眼鏡なんか持つてるんだ？」

「何って決まつとるやる。女子との体育の時間中、いつ服の隙間からブラチラやパンチラがあるか分らんやる！！」

「アウトだ」

堂々と言つな。

隠す気ゼロだな。

「それはそうと、合同とは聞いていたけどここまでの人数がいるのか……一体何組まで来てるんだ？」

「確か去年は七組・八組・九組。今年も一組・八組・九組・十組や結構いるものだ。

この数も納得がつく。

「というか一組はお前だけだろ……なんだか適当だな。

「で、あんさんは気付かん訳か？」

「？ 何をだ？」

貝塚は呆れた様に頭をかく。

「あんさんを暗殺しようとしている残りの3人がここにおるってことや」

「！！」

思い出した。

完全に忘れていた……。

「あんさんから見て右方向の非常口の近くに立ってる顔がそっくりな二人組。アレが曲ヶ島兄弟や」

二人組。

どちらも燕尾服を着ている、執事のような風貌な男が二人。

この学院では、基本的に制服は『存在』するだけで、あまり着てくる生徒は少ない。

基本的には学園内の服装は自由、個人の考えを尊重する訳だ。

故にどんな服を来てこようがそれ程の物でなければ目立たないのだが……。

「何故に燕尾服？」

「あの二人は魔軍候補生でありながらも、代々様々な名家に勤めている執事の血筋や。やはり日常的にそれ相応の行動をとれるようにしている修行なんやないか？」

なるほど、そう聞けばなんとなく理解できる。

「んで、もう一人の方やけど……おかしいな、まだ来てへんのかいなあ？」

貝塚は見渡す様に辺りに視線を流すが、見つからない様子。

もうすぐ授業が始まるのに、いないと言うのは変な事だ。

休んでいるのだろうか？

「まあワシも後で調べ直すとするわ。もしかして風邪かもしれへんしな」

そう言うと、体育館の入り口から剃らずに放っておかれている無精髭、ボサボサの髪、全身を青いジャージで身を包んでいる先生が現れた。

老年体育担当教諭、伊賀烏合先生だ。

「えー、今日の授業は1、2、3、4時間目までを使用しての基礎体力の強化という事で、個人での対抗模擬戦闘フィールドを行う。場所は校舎内以外なら自由。対戦する際は、その相手を戦闘不能状態に持ち込むか、降参と言わせるかのどちらか二つ。生き残ったら勝ちという実にシンプルなルールだ。言うこと言ったから後は適当に初めてよし、先生は仮眠室で寝る」

ちなみに性格は適当。

なんで教師になった。

伊賀先生はそのまま頭を掻きながら入ってきた入り口から帰って行った。

「オイ、回座」

「ん？ どうした貝塚？」

急に後ろから声をかけた貝塚の方に振り返ると、そこいる生徒は一人もいなくなっている。

先程いた大量の生徒の影はそこにはなく、いるのは俺と貝塚のみ。……あれ？

「まあ魔王代理人と真面目に戦闘を挑む奴はいないわな」
忘れていた。

今や俺が魔王代理人となっている現状はこの学院内で知らない奴はいない（俺のクラス経由で伝わったのだが）。

一応、レベルとしては魔王<魔王代理人<魔王候補生といわれるくらいだ。

それに、模擬戦闘というのはどれだけ戦闘で勝利を積むかで成績に影響する。

他の魔王候補生だってわざわざ代理人の俺と闘い合うなんて不効率なことは避けたいだろう。

「でもディーナは何処に行ったんだ？」

「今日は調子でないから適当な場所で寝とくらしい」
「のび太君か」

実はアイツは真面目でもなんでもないんじゃないか？

人は見た目によらない、とも言っし。
「まあ、今はそんな事気にしてられんで？」

貝塚は白衣の内から常時身に着けている血液カプセルを3つ取り出すと、それを齧る様に飲み込む。

すると貝塚の体はまた粘土のように、そして骨の軋む音を響かせながら変態した……みたいだ。

あまり変化が無いが、どことなく変わってることが分かる。

「さあ、さつさと出なされや、そこのお二人さん」

貝塚は睨むように扉に視線を投げる。

「バレタばれた」

「ハイ、見つかってしまいましたね。こつも早く見つかるとは正直驚きです」

扉の後ろの黒い二つの影。

そこから現れたのは。

曲ヶ島右折、左折。

「一斉に散った生徒に紛れて隠れ、隙を伺っていましたが。さすがは貝塚様、ワタクシ達のする様な事は御見通しでしたか」

「オミトオシおみとおし」

静かな空間に足音を鳴らし、こちらに一步一步と近づいてくる。顔がまったく同じなその二人は。

不気味な笑顔を浮かべつつ。

「貝塚様とは一度ご面識が御座いますが、回座様とは今日が初対面なため、失礼ながらここで自己紹介をさせて頂きます」

「イタダキマスいただきます」

二人は俺達の目の前まで来ると、その場で背筋を正し、一礼する。「ワタクシ、曲ヶ島左折と申します。弐年八組に所属させて貰って頂かせております」

透き通る様な淀んだ声。

左目にモノクルをかけ、姿勢良く、長く黒いその髪を右目にかかるように分けられている。

「ウセツうせつ、ヨロシクよろしく」

純粹の様な不気味な声。

左折とは対照的に右目にモノクルをかけ、長い黒髪は左目にかかるように分けられている。

「今日はお願いが御座いまして、参上した次第で御座います。そして、そのお願いと言うのが」

左折が言いかけようとすると、右折が先にその言葉を。

不気味に投げつける。
「コロサレテこるされて」

1 - 拾五 蟹蜂殺らず 左折 vs 宗谷

『魔軍』

国の持つ、いわば軍隊のような存在の名前。

まあ軍隊の代名詞とでも受け取って貰って問題ない。

その魔軍は自衛のため、防衛のため、時には侵略のため。

日々戦闘訓練を積んでいる戦闘のエキスパート集団。

そして、その戦闘はほとんどが魔法によるものだ。

この世界に戦車やら機関銃やら戦闘機等は存在しない。

戦闘方法は前述の通り、魔法関連なものばかり。

しかし、魔法だけが相手と戦闘をする行為と思うのはお門違いだ。

ただの蹴り。

ただの突き。

これらも立派な戦闘法。

単に魔法より威力が劣るとだけで使われていないだけだ。

ならその欠点を失くせばいい。

簡単だ、容易に考えられる。

ただ単に。

威力を。

高めればいい。

それだけだ。

それだけで。

それのみだ。

しかし、それが難しいんだ。

そう言う人の言い分は最もだと思う。

世の中簡単ではないし、そう単純なものでもない。

そういう意見は当たり前すぎるだろう。

しかし残念ながら、それを普通に行う人間……いや、人外がいる。

よく考えてみる、此処は異世界だぞ？

『常識』をさっさと捨てると前から言ってるだろう。
ちなみに、今回の相手がソレだ。
そう、魔法を使わない戦闘法を。
いともたやすく実現させる奴等。
その名前は。
まがのしま
曲ヶ島。

「では、参ります」

「マイルまいる」

左折、右折はその場別れる様にお互いが反対方向に駆け出し、左折は俺を、右折は貝塚を相手取るような形になる様に位置取ってきた。
た。

「なるほどな、この授業も生徒会テストメントの根回しかもしれんな」

「生徒会テストメントが？ なんでわざわざ？」

「模擬戦闘に託かこけて、曲ヶ島兄弟にワシらを事故死として殺させるつもりやろう。1〜4時間かけての長期模擬戦やてほとんどやらへんのに、急に行われたのが何よりも胡散臭い」

なんてことだ。

学院の授業内容までも変更させ、俺たちを殺そうとしている。
テストメント
生徒会も本腰を上げてきた………というところか。

「2体2……相手はあの曲ヶ島やし、ワシの魔法はあまり人前に出せるもんじゃないしなあ………まあ、ワシはこちらさんを相手するとして………そちらさん、頼んだで」

貝塚はおびき寄せる様に近くの出入り口のゲートへと走り出す。

「マテまで」

右折は簡単にその後を追いつ、二人ともゲートをくぐり、姿を消した。
た。

その場には俺と左折だけになった。

1対1……右折は貝塚に任せるとして、俺はこの左折に集中するとするか……。

俺は構える様に相手に向かい、戦闘態勢に入る。

「裏切り者の貝塚様は右折に任せるとして、貴方様のお相手は不肖ながらこのワタクシがお相手させて貰います」

一旦の間。

その間を一瞬で潰すようなスタートダッシュを左折は決め、両腕を肩甲骨が出るほどに引きつつこちらに向かう。

左折はそのまま俺に突っ込む様に走り、間合いに入ると、そのまま俺の喉を突こうとする。

人差し指で。

………指？

人差し指だと？

何故指で？

指一本で俺に攻撃……なめているのか？

それとも何か考えが？

俺は念のために警戒し、左折の右側に回り込むように避けた……

そして。

俺の背後にあった体育館の壁が貫かれた。

「……！？」

その指は。

コンクリートの壁を、まるで発泡スチロールに指で穴を開ける様に。

簡単に。

簡略に。

貫いた。

「……。さすがは回座様、ワタクシの攻撃など簡単に読まれますね。しかし、念のためお気を付け下さいませ。ワタクシの指は、人差し指ならぬ」

壁を貫いていた指を引き抜き、破壊された時に舞った砂埃を払う

様に。

人差し指を俺に向かって指す。

「人差し指に御座います」

確かに、あの威力なら人間など簡単に貫けるだろう。

針で刺す様に、その指で一刺し。

一刺しで。

人刺す。

人差し指。

通り名通りの『殺人蜂』。

威力もさることながら攻撃速度も速い。

魔法で強化しているのか？

それとも特殊な武術？

疑念を抱く俺に対し、まったく躊躇ない攻撃を左折は繰り返す。

両手での突く……いや、『刺す』攻撃。

俺に反撃の隙さえも与えないその猛攻に、俺はただただ凌ぐことしかできない。

攻撃を避けれたと思いきや、その避けた地点に攻撃がすかさずやってくる。

スウエーの様^{パワー}に避けているが、当たるのも時間の問題だ。

桁外れの力^{スピード}。

段違いの速度。

人と呼んでいいのか分からないソイツは俺を。

刺し殺そうとする。

軌道は一直線で、避け易いとも思えるが、攻撃速度が速い。

目で分かり、認識し、体に命令を起し、避けるのがやっとだ。

いや、避けきれていると言えば嘘になる。

その攻撃は、俺の体を全てかすっている。

俺の皮膚からは次々と血が滲みだし。

ジワジワと俺に痛みを感じさせる。

俺の脳が体に命令して、やっと避けれる。

信号の伝達速度は0・1秒。

それはつまり、左折の攻撃は。

0・1秒に限りなく近い。

圧倒的な速さを持つ攻撃に、俺はストレート魔拳を出せない。

俺の唯一の使用可能魔法、ストレート魔拳はそう乱用できる技ではない。

数秒の時間をもち用いり、魔力を拳こぶしに乗せて放つ。

隙が生まれやすいこの技を使えば。

その間を左折は突くだろう。

突くように。

刺す。

「ちっ……！」

床を踏ん張る様に蹴り、数mの距離を開ける。

この間合いではどうしても奴の攻撃範囲内。

一度距離を取って、反撃の隙を伺おう。

しかしその浅い考えに。

その行動に。

その間に、意味は。

無かった。

「お待ちくださいませ、回座様」

！？

速い！？

開。
ほぼ俺と同時に床を蹴った左折は、そのまま刺すような突きを再

反射神経まですば抜けているときたものだ。

いよいよもって殺されるかもしれない。

間合いを開けても、瞬間的に詰められる……。

その脚力と認識力も、俺とは段違いだ。

かの有名なボクサー、『モハメド・アリ』のボクシングスタイルは、『蝶の様に舞い、蜂の様に刺す』と形容された。

さながら、左折は『蜂の様に素早く、蜂の様に刺す』と言った

所だろうか。

さらには攻撃しようとも相手の攻撃の方が先。

このままでは一方に勝機が見えない。

どうする俺……。

この場を切り抜ける策を試行錯誤しながら、そして避けながら考える。

城の書物を毎日のように読む俺は、今では中々の知識量だと自分でも自負している。

脳内に存在する山の様な本の中から、俺は打開策となるものを探す。

「どう致しましたか回座様？ このまま避けてばかりでは、その内お体に穴が開いてしまいますよ？」

悠長に喋りながら攻撃を止めようとしない左折。

左折その手にある白い手袋は、最早俺の血で白とは言えない色だ。真っ赤に染まっていくその手袋は。

俺に恐怖を感じさせる。

素早い動きと相当な威力なこの技を、まるで体力に反比例するように額には汗一つない。

涼しい顔を保ち、まるで疲れた様子を見せない。

無尽蔵と思わせるその体力。

人間離れた破壊力。

そこから俺の頭から導かれた一冊の本。

書名は、『ヒューマノイド・タイプ人類進化別歴史書』

そして、そこに明記されている1つの名が。

左折のこの人間離れさに答えが見ついた。

その答えは。

「ネクスター亜人か……！」
ネクスター亜人。

この異世界では、人類は様々な人種に分かれる。

一番数が多く、世界の人口の60%を占める、魔法等を使用でき

る魔核スキルを持ち、身体能力は一般的な人間ノーマル。

他にも様々な人種が存在し、海で生きするのに特化した人種。

暑い気候、寒い気候など、環境に特化している人種。

そして。

魔法等を使用する魔核が優れにくく、魔法をほとんど使えないあ
る人種が存在する。

数は世界人口の1・2%未満。

その名は……ネクスター 亜人。

元を辿れば一つだった、この多用する現在の人種は、過去にあつ
た謎の現象、『何か』によって別れたという。

「はい、ワタクシはネクスター 亜人で御座います」

左折はごく普通に俺の問いかけに返答を述べ、攻撃を繰り返し続
ける。

ネクスター この人間離れの攻撃も納得がついた。

ネクスター 亜人の特徴の一つは、魔核以外の全てのステータスが人間を凌駕
する事。

体力も知力も。

それは……魔法を使えないというハンディーさえも覆うほどに。

ネクスター しかし、亜人はその人間離れした力を恐れられ、迫害を受けられ
ている人種。

ネクスター 日本では亜人受け入れ主義だが、基本的にネクスター 亜人は人間とは関わり

を持つとうとしない。

ネクスター こちらと同様、ノーマル 亜人も人間を嫌っている。

ネクスター 2つの人種の折り合いは悪く、故にネクスター 亜人と会え、こうして会話と
いて成立するのは、とてつもないレアケースなのだ。

「ワタクシは亜人、あなた 貴方方達とは筋力の発達がまったく違います。

そして、まだ魔法が未熟なあなたでは私の足元にも及ばないでしょ
う」

俺の眼、喉、心臓、頭。

刺されては一溜りもない場所を、左折は容赦なく攻めてくる。

一刺し一刺しに静かな殺意を込め。

その攻撃は視界を塞ぐほどに繰り出される。

壁に何度か追い詰められれば、俺事壁を破壊しようとする。

一応言っておくが、壁が脆い訳ではない。

この体育館は、魔法練習もするため、壁、床、天井等は全て特殊素材で出来ている優れものだ。

簡単には壊れず、簡単には崩れない。

しかし、この男。

曲ヶ島左折は。

ぶち壊す。

その圧倒的な力^{パワー}で。

ちなみに、人差し指の攻撃方法も理解できた。

群を抜く元から備わるその力^{パワー}。

その圧力が一点に集中するという事は、威力の向上を意味する。

更に、指だけの攻撃と言うのは拳^{こぶし}の攻撃より必然的に速く、鋭くなる。

亜人が相手……。

正直、コレは辛い戦いになるだろう。

持久力も体力も戦闘力も相手の方が上と考えるのが妥当だ。

そして、こういう戦いに一番得策なのは。

一撃で仕留める事。

長期戦に持ち込もうとしてはいけない、あくまで短期戦に。

相手の隙を突き、最高の一発をきめる。

しかし、亜人に常識は通じない。

隙が生まれるとは考えづらいし、このままでは俺の体力が底を着いてしまう。

相手は『刺す』という単純作業をしているが、こちらは全力で避けないと刺される。

そのため、どうしても大振りな動作になってしまい、体力の消耗が半端なく激しい。

即ち、全力の一発を決めるならば、今すぐにも決めなければいけないのだ。

……………仕方がない。

全ての考えを捨て、そしてこっちも。

無傷……………いや、軽傷で帰れると思うのは止めよう。

俺は動きを止め。

相手の鋭い一刺しを。

その刺すような人刺し指を。

体で 受ける。

「!?!」

左折はその涼しい表情を若干崩す。

確かに、このわざとらしい回避で驚くなと言うのも無理がある。

俺は相手の刺そうとした心臓の位置をずらすように避け、ちよ

ど肩の辺りを刺されるように。

避けた。

いや、避けては無い。

攻撃を誘導させた。

指された箇所からは血が噴き出す様に溢れ、その血は俺の服を染めていく。

「いやいや、一回こっちはいいよ」

俺は自分の体に刺さったままで動いていない相手のその手を掴み、反対の手に魔拳マクセントを発動させる。

「殴れねえからなあ!!」

一撃必殺。

体力全てを持っていかれるほどの力を全て乗せ。

一発。

今日は二度と魔法が使えないと言っほどの、魔王級の特大魔力の。

その一撃は。

左折を軽快に……………吹っ飛ばす。

「っ……………があはっ!!」

反対方向の壁に吹き飛んだ左折は壁に突っ込み、めり込むその体は。

辺りに残骸を飛び散らし……ゆっくりと目蓋を閉じていく。

俺の肩の辺りからはさつきとは比にならない程に、そして湧水の様
に血液が噴き出す。

その血は次々と床に落ちていき、俺の足元は血溜りとなってゆく。

「……………、イテエ……………」

さすがに、この傷であの一発はキツイ。

傷口は予想通り開き、その血の量は俺の意識を奪うほどだった。

肉を切つて骨を断つ。

そんな感じの捨て身技にも見えるが、どう考えてもこっちの損傷が半端ない。

一発貰っただけでこの威力。

当たり所が悪ければ腕一本吹き飛んでいただろう。

俺には珍しい運勝負だったが、今日の俺はどうやらラッキーだ。

跪くようにその場に倒れ込むと、意識は保ってはいるものの、どうも体が動かない。

「ああ…………… 恰好悪いいな…………… 漫画の主人公ならここは華麗に必殺技とかで倒して、もう一人仲間を助けに行く…………… って感じだろうが……………」

俺はその開かれた屋根から見える、雲の無い空を見上げながら、誰かに語り掛ける様に。

呟く。

「…………… どうも俺は脇役止まりってところか」

笑いを零しながら、俺は静かに貝塚の帰りを待つとした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432z/>

魔王代理人の日頃

2012年1月14日13時51分発行